

# 2025 年羅臼岳登山道ヒグマ人身事故 報告書

2026 年 3 月

知床ヒグマ対策連絡会議

## 目次

1	本報告書について .....	1
1.1	事故の概要 .....	1
1.2	本報告書の目的 .....	1
1.3	検証の体制 .....	1
2	基礎的情報 .....	3
2.1	羅臼岳と登山道の概要 .....	3
2.2	利用の現況 .....	5
2.3	ヒグマの現況 .....	6
2.3.1	ヒグマの目撃件数 .....	6
2.3.2	あつれきの発生状況 .....	7
2.3.3	過去の人身事故の発生状況 .....	9
2.4	管理の体制 .....	10
2.4.1	知床半島（知床連山一帯）の管理体制 .....	10
2.4.2	ヒグマの保護管理 .....	10
2.4.3	協議および連絡調整の体制 .....	10
2.4.4	関連する計画やルール等 .....	11
2.5	登山道等を対象とした情報提供・管理活動の実施状況 .....	13
2.5.1	日常的なヒグマ情報の発信 .....	13
2.5.2	要注意情報や危険事例発生時の調査と発信 .....	14
2.5.3	登山道の閉鎖等の事例 .....	14
3	事故の概要（事実情報） .....	15
3.1	本件事故に至る経緯 .....	15
3.2	捜索救助および関係機関の対応経過 .....	15
4	事故調査と分析 .....	20
4.1	事故発生現場 .....	21
4.1.1	事故発生の時刻と場所 .....	21
4.1.2	事故発生前後の天候 .....	21
4.1.3	事故発生地点の環境（図 4-3） .....	24
4.2	事故の経過と事故調査 .....	27
4.2.1	事故発生時 .....	27

4.2.2	事故発生後 .....	27
4.2.3	被害者の捜索救助活動と事故調査.....	27
4.2.4	その他登山者の動向と救助活動 .....	29
4.3	捕獲個体の情報および加害個体との関係性.....	31
4.3.1	捕獲個体について .....	31
4.3.2	捕獲個体と加害個体の関係 .....	31
4.3.3	捕獲個体の識別と履歴.....	32
4.4	事故発生以前に登山道で確認された要注意事例とその対応 .....	33
4.4.1	今年度の岩尾別コースにおける要注意事例.....	33
4.4.2	要注意事例への対応状況 .....	34
5	事故の原因 .....	36
5.1	直接要因.....	36
5.2	間接要因.....	37
5.2.1	ヒグマ生息地における安全対策や装備、事前の情報把握 .....	37
5.2.2	ヒグマリスクの周知と認知 .....	37
5.2.3	利用自粛や登山道の閉鎖措置.....	37
5.3	背景事象.....	37
5.3.1	人とヒグマとのあつれきの増加 .....	37
5.3.2	知床世界自然遺産利用者全体への情報提供.....	38
5.3.3	クマ対策人員の逼迫 .....	38
6	事故対応の検証.....	39
6.1	登山利用者への情報提供・注意喚起のあり方 .....	39
6.2	登山道における問題個体確認時の対応 .....	39
6.3	事故発生時の対応 .....	40
6.3.1	初動対応.....	40
6.3.2	事故調査.....	41
6.3.3	危機管理広報 .....	41
7	再発防止策 .....	43
7.1	再発防止策の方向性 .....	43
7.2	登山利用者への情報提供と指導の強化（平時） .....	44
7.3	問題個体・危険事例を把握した際の対応の明確化 .....	44
7.4	問題個体発生を抑止の方策 .....	45
7.5	中長期的対応 .....	45

## 本報告書について

### 1.1 事故の概要

2025年8月14日11時ごろ北海道斜里町の羅臼岳登山道（岩尾別コース）を下山中の登山グループ（2名パーティ）のうち1名（以下、被害者という）がヒグマに襲われたとの通報が警察に入る。通報者は、被害者の同行者。知床連山登山道全線を閉鎖とし、同日より警察を中心とした捜索救助活動が行われた。

翌8月15日の捜索活動において、事故発生地点より約200m南西側の林内で被害者と被害者に接触している0歳2頭連れ親子のヒグマ（計3頭、捕獲個体という）を発見した。ヒグマ3頭はその場で銃により捕獲された。被害者はその後、病院に搬送され死亡が確認された。なお、本件事故による2次的な被害は発生していない。

### 1.2 本報告書の目的

本報告書は、本件事故に関わる対応経過や調査結果等の情報を整理分析し、その原因等を検証するとともに、今後の対策や管理のあり方を検討し、知床地域におけるヒグマによる人身事故の防止や被害軽減に寄与することを目的として作成するものである。

### 1.3 検証の体制

本報告書は「知床半島ヒグマ対策連絡会議（以下、ヒグマ連絡会議という。）」が作成し、発表するものである。同会議は、「知床世界自然遺産 地域連絡会議」の部会に位置づけられ、「知床半島ヒグマ管理計画（2.4.4を参照）」に基づき、知床のヒグマ対策の推進やモニタリング等の実施を目的として設置されている。同会議の構成団体と本件事故対応に関わる主な役割分担を表1-1に示す。

なお、事故の検証や再発防止策の策定にあたっては、専門的な観点からの助言やチェックを受けるため、有識者により構成される知床世界自然遺産地域 科学委員会 ヒグマワーキンググループ（座長：佐藤喜和 酪農学園大学教授）および適正利用・エコツーリズムワーキンググループ（座長：愛甲哲也 北海道大学教授）の助言を得た。

構成機関	本件事故対応に関わる役割分担
環境省釧路自然環境事務所	国立公園管理に関わる事務、専門家（有識者）との調整
林野庁北海道森林管理局	国有林野に関わる事務
北海道	事故調査および試料等の分析（ヒグマ対策室）
斜里町	ヒグマ連絡会議の開催（事務局）、ヒグマ人身事故斜里町対策本部の運用 登山者（斜里側）への注意喚起、町民等への情報発信
羅臼町	登山者（羅臼側）への注意喚起、町民等への情報発信
標津町	町民等への情報発信
公益財団法人 知床財団	事故調査、事故情報とりまとめ、ヒグマ対策に関わる情報提供

表 1-1. 知床半島ヒグマ対策連絡会議の構成員

## 2 基礎的情報

### 2.1 羅臼岳と登山道の概要

羅臼岳は知床半島の脊梁山脈である知床連山の最高峰で標高は1,661mである。山麓・山腹部は針広混交林が分布し、標高700m前後からはダケカンバ林、標高1,200m前後からはハイマツ低木林となる。遅くまで雪溪の残る場所には雪田群落が分布している。深田久弥による日本百名山にも掲載されており、知名度や人気も高い。

羅臼岳に至る登山コースは斜里町の岩尾別温泉登山口を起点とした「岩尾別コース」と羅臼町の羅臼温泉登山口を起点とした「羅臼温泉コース」の2コースがあり、両コースは羅臼平で合流し羅臼岳山頂に至る。また、羅臼平からは知床連山の縦走路があり、縦走路は硫黄山登山口を起点とした「硫黄山コース」に接続している(図2-1)。多くは日帰り登山だが、縦走登山などでは幕営による宿泊利用もされている。

岩尾別コースの標高差は1,431mであり、往復の歩行距離は12.6kmである。標準的な登山時間は、登りが5時間、下りが3時間30分程度である(休憩時間を除く)。登山口となる岩尾別温泉には、ホテル(2025年度は休業)と有人の山小屋がある。

夏山登山のガイド情報<sup>1)</sup>によると、岩尾別コースは中級程度の難易度とされ、「羅臼岳のメインコースとして多くの登山者が登っているが、日帰りとしては長時間の行動となるためペース配分に配慮が必要」と案内されている。

---

<sup>1)</sup> 「山と高原地図1」利尻・羅臼・知床・斜里・阿寒・札文,昭文社,2023年度版,昭文社



図 2-1. 知床連山地区の登山道概念図。ベース地区は国土地理地図を用いた。

## 2.2 利用の現況

本件事故が発生した岩尾別コースは、登山道の整備状況も比較的良好であり、最も短い所要時間で羅臼岳の山頂に至ることができるため、知床地域の山岳の中では登山者が最も多い。同コースの年間の登山者数はおよそ 5,000 人弱と推定（2015 年-2024 年の平均値）されており、知床連山の入山者数の約 8 割を占めている（図 2-2）。登山シーズンは 7 月から 9 月のおよそ 3 ヶ月間である（図 2-3）。

なお、斜里町の観光客入込数は年間 100 万人弱（2024 年度実績、コロナ禍前は 120 万人程度）とされており、観光客数に占める登山者の割合は 1%に満たないと推定される。

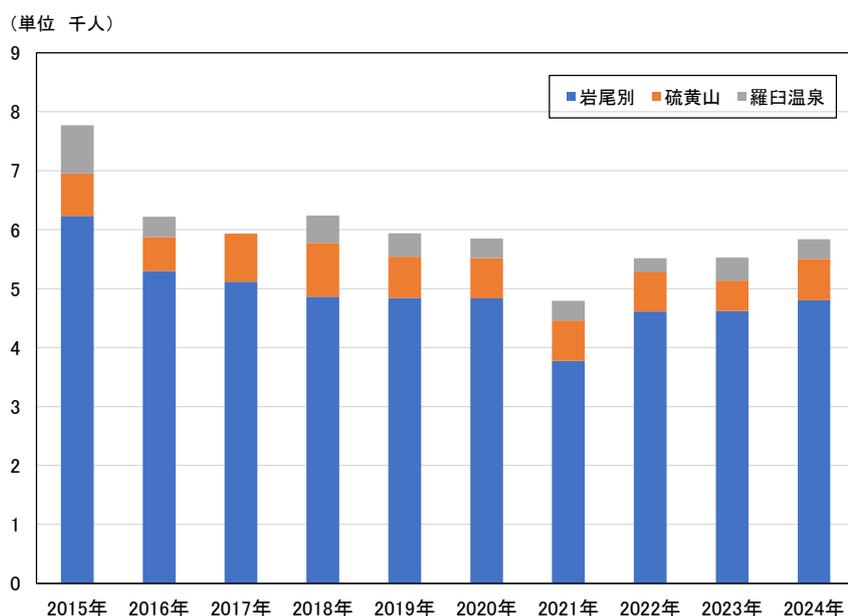


図 2-2. 岩尾別、硫黄山、羅臼温泉登山口の利用者数の年推移。国立公園利用状況調査(環境省)による。

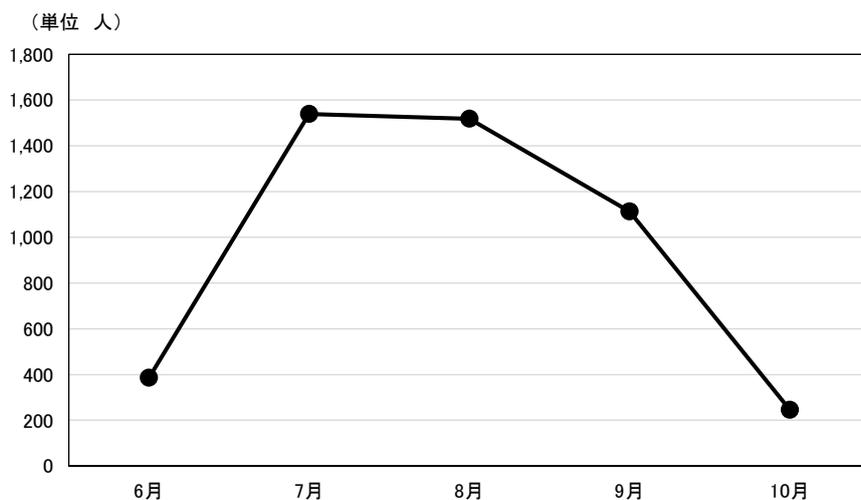


図 2-3. 岩尾別コースの月別利用者数(6月-10月)。国立公園利用状況調査(環境省)による。

## 2.3 ヒグマの現況

### 2.3.1 ヒグマの目撃件数

知床半島は全域がヒグマの生息地であり、その目撃件数は北海道内でも突出して多い。年変動が大きいものの、近年の斜里町におけるヒグマの目撃件数は 1,000 件を超えることが常態化しており（2015 年～2024 年の平均目撃件数は 1,253 件）、大量出没のあった 2023 年においては 2,000 件を超過した（図 2-4）。また、通報を受けて出動する現場対応の件数も多い年では 1,000 件を超えている。

斜里町内でのヒグマ目撃のおよそ 7 割～8 割が国立公園内での目撃である。地区別に検討すると、登山利用が主となる知床連山地区での目撃件数は年間 10 件～140 件と年変動が大きいものの、斜里町全体の目撃件数に占める割合は 10%以下である（図 2-5）。ただしこれは、登山シーズンが限定的であること、一般観光客数と比較して登山者数は僅少であること、目撃が全て通報されるとは限らないことに留意する必要がある。

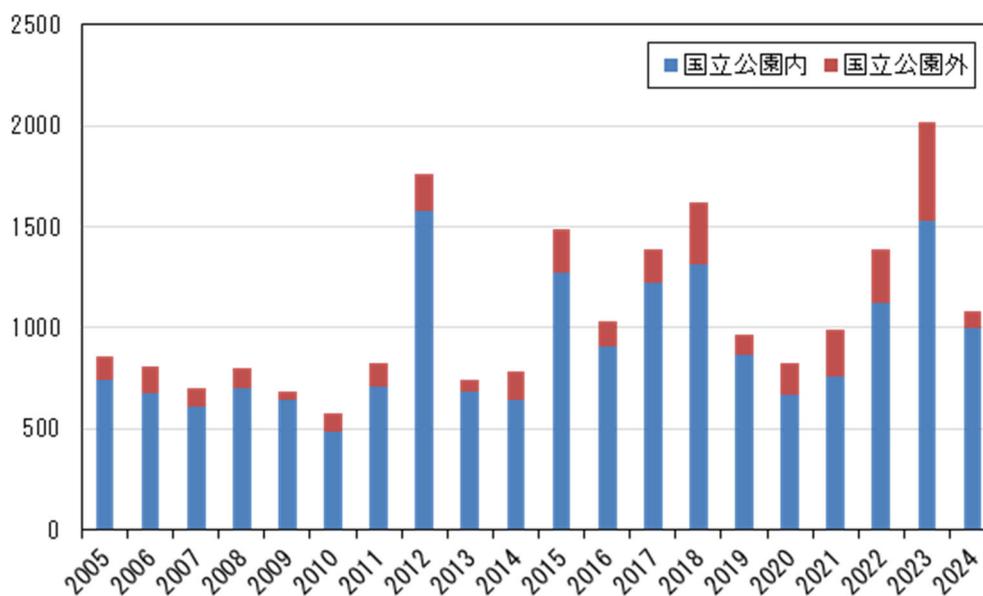


図 2-4. 斜里町内におけるヒグマ目撃件数の年推移。斜里町ヒグマ対策業務報告書による。

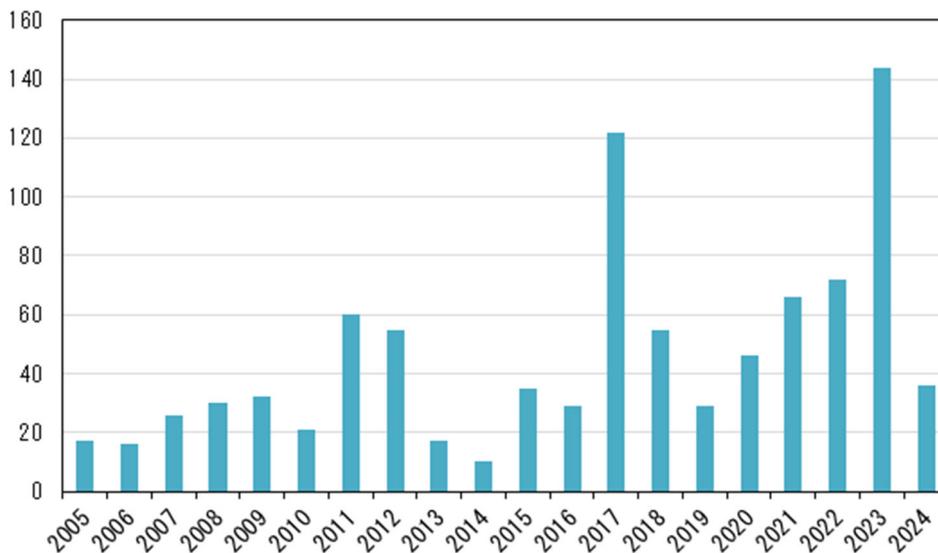


図 2-5. 知床連山登山道(斜里町側)におけるヒグマ目撃件数の年推移。斜里町ヒグマ対策業務報告書による。

### 2.3.2 あつれきの発生状況

住民生活、産業活動、観光利用等によるヒグマとのあつれきも表面化している。斜里町におけるヒグマの人為的な死亡数は年間 20 頭以上（2005 年-2024 年の平均）であり、その多数が市街地や農地に侵入したヒグマが捕獲された事例である（図 2-6）。また、観光等利用者の問題行動に起因する危険事例の発生件数も増加傾向となっている（図 2-7）。

知床連山地区においても、ヒグマが登山道付近に滞留し登山の続行が困難になる事例や、登山者がヒグマと至近距離で遭遇するといった危険事例が過去に報告されている。（表 2-1）（表 2-2）

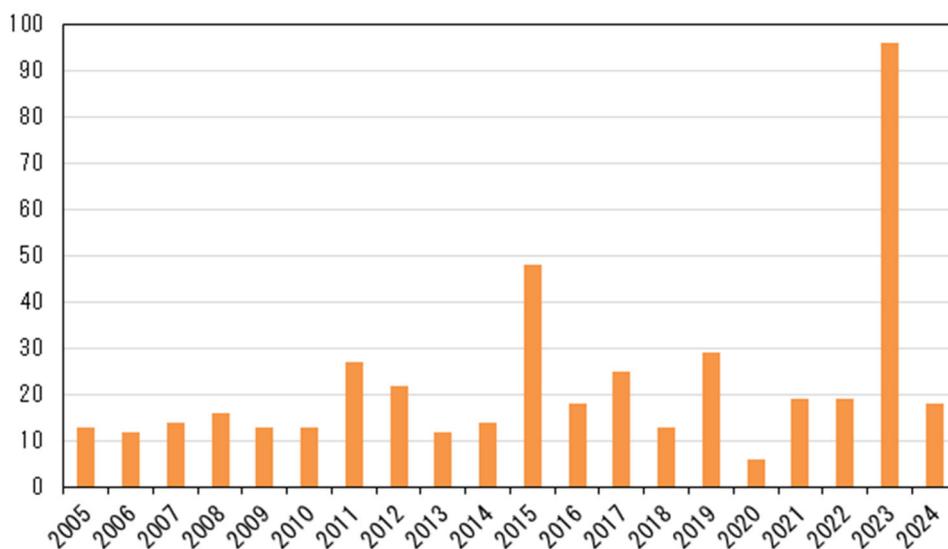


図 2-6. 斜里町側におけるヒグマの人為的な死亡数の年推移。斜里町ヒグマ対策業務報告書による。

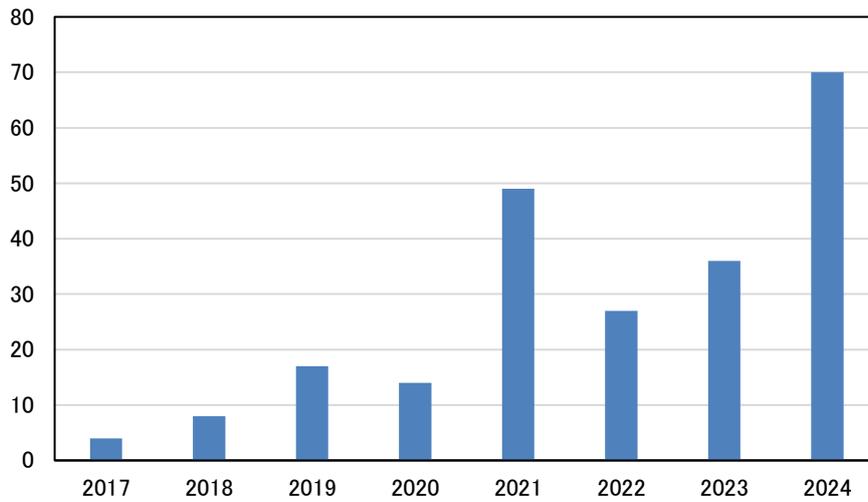


図 2-7. 観光等利用者の問題行動に起因する危険事例の発生件数。ヒグマ対策連絡会議資料による。

	羅臼岳 (岩尾別コース)	硫黄山	縦走路	羅臼岳 (羅臼温泉コース)
2012(平成24年)	8	2	2	0
2013(平成25年)	1	0	0	0
2014(平成26年)	7	1	1	0
2015(平成27年)	0	0	0	0
2016(平成28年)	0	0	0	0
2017(平成29年)	33	7	1	4
2018(平成30年)	15	3	0	1
2019(平成31年)	0	0	0	5
2020(令和2年)	13	5	0	0
2021(令和3年)	1	0	0	0
2022(令和4年)	2	1	0	1
2023(令和5年)	5	3	0	0
2024(令和6年)	1	0	0	3

表 2-1. 登山道におけるヒグマ危険遭遇件数 ヒグマ対策連絡会議資料による。

	コース	状 況	場 所
2023/5/6	羅白岳登山道 (岩尾別コース)	3-5mの至近距離遭遇、ヒグマはうなって少し近づいてきたためクマ撃退スプレーを噴射	羅白岳登山口付近
2023/5/7	羅白岳登山道 (岩尾別コース)	50m先のヒグマが登山者に対して唸った	オホーツク展望から50mほど登ったところ
2023/7/3	硫黄山登山道	10m以内の至近距離遭遇	羅白岳登山道岩尾別温泉コース標高420m
2023/7/4	硫黄山登山道	10m以内の至近距離遭遇	硫黄山登山口付近
2023/7/4	羅白岳登山道 (岩尾別コース)	10m以内の至近距離遭遇	硫黄山登山口付近
2023/7/4	羅白岳登山道 (岩尾別コース)	10m以内の至近距離遭遇	650m岩峰付近
2023/7/8	羅白岳登山道 (岩尾別コース)	登山者から5mまでヒグマが接近してきた	弥三吉水の下
2023/7/31	硫黄山登山道	親子ヒグマが登山者を気にせず歩いてきたため、藪に飛び込んで回避した	羅白岳登山道 オホーツク展望付近
2024/8/17	羅白岳登山道 (岩尾別コース)	カーブ先で至近距離遭遇、ヒグマが登山者に対し威嚇した。	新噴火口下付近

表 2-2 登山道におけるヒグマ危険遭遇事例＜抜粋＞ ヒグマ対策連絡会議資料による。

※直近2ヶ年（2023年 2024年）状況がわかっているもの抜粋

### 2.3.3 過去の人身事故の発生状況

知床半島全体（斜里町・羅臼町）でみると、2017年以降、ヒグマによる人身事故は4件発生している（本件事故を除く）。いずれもヒグマ等の捕獲従事者（ハンター）が受傷した事故である。死亡事故は1974年（斜里町）と1985年（羅臼町）にそれぞれ1件記録されている。いずれもヒグマの捕獲中にハンターが襲われた事例である。

## 2.4 管理の体制

### 2.4.1 知床半島(知床連山一帯)の管理体制

#### 国有林野

知床連山一帯は国有林野として林野庁北海道森林管理局により土地の管理がなされている。また、岩尾別コースの大部分が保安林および保護林（知床森林生態系保護地域 保存地区）に指定されており、「原則として人手を加えずに自然の推移に委ねる」地域と位置づけられ保護が図られている。

#### 国立公園

知床連山一帯は知床国立公園（自然公園法に基づく）に指定されており、環境省釧路自然環境事務所が公園管理事務を所管している。岩尾別コースは公園計画において歩道（羅臼岳登山道線）の一部に位置づけられており、主に環境省が登山道の維持管理や修繕等を担当している。また、周辺は特別地域ならびに特別保護地区に位置づけられており、動植物の採取等の行為が規制され保護が図られている。

### 2.4.2 ヒグマの保護管理

#### 国指定知床鳥獣保護区

知床連山一帯は国指定知床鳥獣保護区（鳥獣保護管理法に基づく）に指定されており、環境省釧路自然環境事務所がその運用を担当している。狩猟が禁止されているほか、鳥獣の生息・繁殖の場として保護が図られている。

### 2.4.3 協議および連絡調整の体制

#### 知床世界自然遺産地域 科学委員会

知床世界自然遺産地域の自然環境を把握し、科学的なデータに基づいた管理を行うために必要な助言を得るために、学識経験者や行政機関を構成員として設置されている。個別課題への対応を協議するワーキンググループ（以下、WG とする）が設置されており、本件事務事故についてはヒグマ WG と適正利用・エコツーリズム WG との関連性が高い。

#### 知床ヒグマ対策連絡会議

知床のヒグマ対策の推進とモニタリングの実施、これらに関する情報共有と進捗管理を実施することを目的として設置されている。

#### 適正利用・エコツーリズム検討会議

世界遺産地域の適正な利用のあり方を検討することを目的として地域関係団体、学識経験者、行政機関を構成員とする「適正利用・エコツーリズム検討会議」が設置されている。

#### 知床世界遺産施設等運営協議会

世界遺産地域の施設等の管理運営や情報提供、ルールの普及等を目的として関係行政機関と地域団体を構成員とする「知床世界遺産施設等運営協議会」が設置されており、年1回程度の総会が行われている。また、同協議会の部会として「羅臼岳登山道維持管理部会」が設置されており、羅臼岳登山道の維持管理に関わる連絡調整や情報共有の場となっている。

#### 2.4.4 関連する計画やルール等

##### 第2期知床半島ヒグマ管理計画（2022年策定、2025年一部修正）

知床半島における住民生活や産業の保護、利用者の安全と良質な自然体験の場の確保、ヒグマの生態と個体群の持続的な維持の3点を目的として策定された計画である。斜里町、羅臼町及び標津町を対象地域とし、対象地域をゾーニング管理<sup>2</sup>するとともに、ヒグマの行動段階区分を規定し、各ゾーンの特性や出没個体の有害性に応じた対策を行うこととしている。現行計画において羅臼岳登山道はゾーン2に含まれている。ゾーン2における管理方策を表2-3に示す。

##### 知床国立公園管理計画（2023年改定）

知床国立公園の管理方針や許認可基準等についてまとめられている。登山道の管理方針として、利用施設の整備は必要最低限とし、安全対策としては、ルールの周知や情報提供に努めるものとしている。また、岩尾別コースは、登山経験があり必要な装備や行動等についての判断ができる中級以上の登山者が自らの経験・技術に応じて利用することが想定されている。

##### 知床半島中央部地区利用の心得

知床世界自然遺産地域の大部分を占める知床国立公園における利用のルールやマナーを定めたものとして、羅臼岳を含む知床半島中央部を対象とした「知床国立公園 知床半島中央部地区利用の心得（2009年策定）」（以下、中央部利用の心得とする）及び知床岬を含む知床半島先端部を対象とした「知床国立公園 知床半島先端部地区利用の心得（2008年策定）」（以下、先端部利用の心得）を環境省釧路自然環境事務所が作成している。

中央部利用の心得では、「ヒグマに象徴される知床の自然に「謙虚さ」と「畏怖・畏敬の念」をもって接することを基本理念とし、3つの柱と10の約束を定めている。登山利用に関しては、自己判断と自己責任を原則とし、①事前の計画と準備を万全に ②ヒグマ対策を万全に ③植生等の保護に配慮した行動を ④尿尿やゴミの処理を適切に ⑤火の扱いに注意するの5点を追加的なルールとして定めている。

---

<sup>2</sup>人間及びヒグマに対する適切な対策をとるため、各地域のヒグマ生息状況や人間活動等の実態に応じて対象地域を複数のゾーンに区分し、ヒグマ個体群の維持と人間活動等の両立・共存を図ることを目的とした管理の手法。知床半島では、ヒグマの保護が優先されるコアエリア（ゾーン1）と人間活動が優先される排除地域（ゾーン4）、その間にある緩衝地帯や防除地域（ゾーン2,3）、観光客などの利用者が多く訪れヒグマへの対応策が限定される地域（特定管理地）の5つのゾーン区分のもと、ヒグマの管理が行われている。

該当地域とその特性	基本的な考え方と対策		出没した個体の行動段階ごとの対応内容				
			0	1 + 行動改善なし (問題個体)	2 (問題個体)	3 (問題個体)	
<p>定住者が少数存在するか、少数の番屋がある遺産地域。もしくは、自己責任での利用が基本となる登山、トレッキング、カヤッキング等の利用者や自然ガイドによるツアー等の参加者が一定程度訪れる遺産地域。</p> <p>定住者は存在しないが、事業所がわずかに存在する隣接地域の山林・山岳地域。低標高の山林の一部では林業等が行われている。登山、山菜・キノコ採り等の利用者や狩猟者が季節的に少数訪れる。</p>	対ヒグマ	<p>ヒグマの重要な生息地であるが、番屋における被害防止や利用者、事業者の安全確保のために、ヒグマに対する必要最小限の人為的介入を実施する。また、必要に応じて誘引物除去や追い払いを実施する。</p>	経過観察	<p>経過観察。必要に応じて追い払いを実施。</p>	<p>番屋周辺では必要に応じて捕獲。</p>	<p>基本的に捕獲。可能であれば追い払いを実施。</p>	<p>捕獲。</p>
	対人間	<p>番屋や事業者への普及啓発や情報提供を行い、食料・ゴミ等の管理の徹底を求めるとともに、電気柵等による防衛策の普及を図る。</p> <p>利用者への普及啓発や情報提供を行い、ゴミや食糧の管理、クマスプレーやフードコンテナの携行等の安全対策等の履行を徹底させる。</p>		<p>情報提供。必要に応じて仮設電気柵による被害の防止。</p> <p>必要に応じて利用自粛と注意喚起。</p>		<p>情報提供。必要に応じて仮設電気柵による被害の防止。</p> <p>必要に応じて利用の自粛、歩道等の閉鎖と注意喚起。</p>	<p>情報提供と安全誘導。</p> <p>利用自粛と注意喚起。</p>

表 2-3. 知床半島ヒグマ管一ン2 (人身・経済リスク:低 クマへの許容度:大 利用者責任:大)の管理方策

第2期知床半島ヒグマ管理計画 p19 より抜粋、一部改変。

## 2.5 登山道等を対象とした情報提供・管理活動の実施状況

### 2.5.1 日常的なヒグマ情報の発信

- 知床連山における登山利用の基本ルールとして、「中央部地区利用の心得」(2.4.4)が定められており、ビジターセンターや登山口に設置された掲示板等で情報提供が行われている。
- 登山道を含めたヒグマの目撃情報、注意喚起情報、基本的な対処法については、知床でのヒグマ情報を発信するwebサイト(知床のひぐま<sup>3</sup>)や同サイトと連動したSNS<sup>4</sup>等で主に知床財団が継続的に発信している。
- 知床自然センター等の国立公園内のビジターセンター、岩尾別登山道の入口にある木下小屋などでは主に登山者を対象としてクマ撃退スプレーのレンタルを実施しており、レンタルにあたっては、使用方法やヒグマ対処法のレクチャーを併せて行っている。
- 岩尾別コースの登山口においては、登山道沿線でのヒグマ目撃情報を登山者から収集しているほか、収集した目撃情報を登山口の地図上に掲示する取組みを2016年ごろから継続的に実施している(写真2-1)<sup>5</sup>。



写真2-1. 登山口(岩尾別コース)におけるヒグマ目撃情報の掲示(9/3撮影)。

<sup>3</sup> <https://brownbear.shiretoko.or.jp/>

<sup>4</sup> Facebook (知床財団ヒグマ対策), X (@bear\_shiretoko), Instagram (bear\_safety\_shiretoko) などの媒体を用いている。

<sup>5</sup> 登山道における目撃情報の多くは、登山者自身の任意による情報提供に基づくものである。2次情報(伝聞)のケースもあり、詳細が不明であったり、目撃者が特定されない場合も多い。また、事象の把握には数日のタイムラグが発生することが多い。

### 2.5.2 要注意情報や危険事例発生時の調査と発信

- ヒグマ管理計画にもとづき、注意の必要な事象や危険事例が発生した際には、主に知床財団が現地調査や聞き取り調査を行い、上記 web サイト等で警戒をよびかける情報を発信している。

### 2.5.3 登山道の閉鎖等の事例

- 過去にヒグマを理由として岩尾別コースを計画的に閉鎖（入山禁止）とした記録は確認できない。
- 関連する事例として、2010年8月22日に岩尾別コースの標高1,000m地点の登山道上でヒグマがエゾシカを捕食する事案が発生し、調査のため11:40～14:00に登山道を一時的に閉鎖した記録がある。その後、8月25日の通報で、ヒグマは登山道直近の林内で捕獲したエゾシカを摂食していることが判明し、現地調査の結果8月26日から9月2日まで岩尾別コースの利用自粛を呼びかけている。

### 3 事故の概要(事実情報)

#### 3.1 本件事故に至る経緯

本節では、本件事故に至る経緯について同行者からの聞き取り調査の結果を基に時系列で整理する。聞き取り調査は8月16日に北海道立総合研究機構(以下、道総研とする。)が実施したものである。また、行動記録は同行者による登山アプリの行動ログを参考としている。

8月14日(木)

##### 事故発生前

05:15頃 被害者、同行者が岩尾別温泉登山口から登山を開始

08:30頃 羅臼岳山頂着

09:00頃 下山開始

10:40頃 弥三吉水通過

11:00頃 事故発生

#### 3.2 搜索救助および関係機関の対応経過

本節では、事故発生の通報を受けてから斜里町による事故対策本部解散までの関係機関等の動静を時系列で整理する。

8月14日(木)

11:10 被害者の同行者が、警察へのヒグマによる人身事故発生の110番通報。

11:20 警察から知床財団に事故発生の連絡が入る。

(各関係機関も順次事故発生を把握)

11:30 斜里町役場が「8.14 羅臼岳におけるヒグマ人身事故斜里町対策本部(以下、斜里町対策本部)」を設置。猟友会へ協力要請。

鳥獣保護区管理センターを現地本部とし、斜里町対策本部と常時連絡体制を構築。

12:05～ 残存登山者救助等のため、道警ヘリ3機、防災ヘリ1機が順次出動。

事故発生のニュース速報が報道。

岩尾別温泉登山口に関係機関職員が順次集合。

13:00頃 ヘリによる救助活動開始。

13:08 臨時のヘリポートとするため知床五湖を臨時閉園。

13:15頃 同時刻までに知床連山のすべての登山口を緊急閉鎖。

13:28 道警ヘリが残存登山者の救助(ホイスト)開始。

以降、残存登山者をウトロ学校グラウンドと知床五湖（当初は道道分岐）にヘリでピストン搬送。

- 13:40 関係機関の連絡調整を図るため、関係機関の連絡官（以下、リエゾン）が斜里町対策本部に派遣。
- 13:59 地上からの捜索救助のため、岩尾別温泉登山口へ知床財団職員（5名。後に2名追加）・斜里町から委嘱を受けた有害鳥獣捕獲従事者（猟友会員）3名が移動。  
14:22 登山口到着後待機。
- 14:10 防災ヘリが現地に到着。
- 14:20 カムイワッカ湯の滝の利用中止を決定。
- 14:30 頃 ヘリ3機体制で残存登山者の救助活動が継続。下山する登山者はオホーツク展望に集合・待機し、順次救助されている状況<sup>6</sup>。  
ウトロ学校にヘリ搬送された登山者は、ウトロ支所（漁村センター）に送られ、事情聴取を受けた後に登山口へ搬送。知床五湖にヘリ搬送された登山者は、知床五湖フィールドハウスで事情聴取を受けた後に登山口に搬送された。
- 14:50 岩尾別温泉登山口に道警山岳救助隊到着。知床財団職員、猟友会員と合流し、地上からの捜索救助隊を組織。2次被害防止のため、ヘリによる残存登山者の救助活動が終了するまでは登山口に待機との指示。
- 15:52 15:32時点で、救助済み人数累計25名、救助中8名、オホーツク展望に残存登山者29名との情報。
- 15:54 斜里町webサイトで事故情報の第1報を発出。
- 16:51 斜里町対策本部が緊急エリアメール配信。
- 17:00 頃 待機中の捜索救助隊は本日の出動断念を決定。翌日の計画協議。  
救助活動優先のため知床五湖、カムイワッカ湯の滝の15日の閉鎖を決定。シャトルバスも運休。
- 17:04 16:26時点でオホーツク展望に残存登山者19名が救助待ちとの情報。
- 17:18 17:17時点でオホーツク展望に残存登山者3名が救助待ちとの情報。  
縦走利用者や宿泊利用者が山中に残っている可能性があるため、道警山岳救助隊を羅臼平にヘリ搬送することを協議。
- 17:19 残存登山者残り6名との情報（一部は自力で下山）。
- 17:40 防災ヘリによる残存登山者の救助が完了。丘珠空港に帰投。
- 17:58 道警ヘリで残存登山者3名を収容。残存登山者の救助活動完了。  
救助人数合計71名との報告（道警ヘリ56名、防災ヘリ15名）。

---

<sup>6</sup> 登山者の救助活動については、4.2.4を参照のこと。

- 18:07 岩尾別温泉登山口の関係機関リエゾン、救急隊など順次撤収。
- 18:14 道警ヘリ羅臼岳上空から登山道を確認したが、残存登山者なし。羅臼平付近は雲が厚く宿泊者の確認はできなかった。
- 18:15 明朝 5 時に捜索救助隊集合を確認。
- 18:54 岩尾別温泉登山口から関係者の撤収完了。
- 20:00 斜里町 web サイトで事故情報の第 2 報を発出。
- 21:15 北海道ヒグマ注意報発出。
- 22:00 現地本部同日の活動終了。

**8 月 15 日 (金)**

- 5:00 岩尾別温泉登山口に捜索救助隊集合。構成は道警 10 名（山岳遭難救助隊 8 名、ハンドラー 2 名、警察犬 2 頭）、猟友会ハンター 3 名、知床財団職員 5 名（うち 2 名はハンター）の計 18 名  
関係機関リエゾンも岩尾別温泉登山口に順次集合。
- 5:30 捜索救助隊活動開始。天候は少雨。風あり。
- 6:10 標高 400m 地点に到達。登山口から警察が調査用のドローンを飛ばすが、強風のため使用できず。雨やむ。
- 7:18 オホーツク展望に到着。同地点から熱源カメラ付きドローンを飛行させ 560m 岩峰地点までの登山道及び南西側林内を調査。熱反応なし。
- 7:45 560m 岩峰通過。さらに上部に前進。
- 8:00 硫黄山登山口に下山する登山者対応に備え、カムイワッカに職員配置。
- 8:20 残存登山者の有無を確認するため、ヘリで羅臼平へ飛行を計画するが強風により困難との連絡。
- 8:45 標高 610m の登山道上に立ち入り禁止の規制線を設置。
- 9:16 強風のため現場でのドローンによる捜索を断念。最大風速 20m/s 程度。人的捜索を開始。捜索救助隊は先行隊（6 名）を編成し、560m 岩峰付近の捜索に着手。警察犬を含めた残りの隊員は 560m 岩峰基部で待機。
- 9:28 登山道直下の斜面にて被害者・同行者の所持品と思われる物を発見。捜索場所の絞込みに成功。
- 9:33 本格的な捜索のため、先行隊（6 名）に 6 名が加わり 12 名（本隊とする）で登山道外の捜索を開始。残る 6 名（分隊とする）は 560m 岩峰基部で待機。
- 9:37 林内に点在する被害者の着衣・所持品などを発見・回収しながら斜面下部を捜索。10:15 の所持品発見を最後に痕跡がなくなり、捜索範囲を拡大。

- 10:45 道警ヘリが知床五湖駐車場に着陸。羅臼平には、雲がかかっており近づけず、残存登山者対応は困難と判断し待機。
- 10:50 560m 岩峰基部に待機していた分隊は下山開始。
- 11:30 クマ撃退スプレーの貸出記録から宿泊利用等による登山者が山中に数組いることを確認。各登山口の駐車車両等の照合を実施。
- 12:00 警察犬を含む分隊が岩尾別温泉登山口に下山。斜里町 web サイトで事故情報の第 3 報を発出。
- 12:12 被害者の登山リュックを発見。痕跡等から再度捜索範囲の絞り込みに成功。
- 12:25 硫黄山登山口に下山した登山パーティー（4 名）を自然センターに搬送。
- 12:39 被害者の所持品・着衣等を回収しながら斜面下部を捜索。
- 13:05 被害者に接触している 2 頭の子を連れた親子ヒグマを発見。捕獲体制に移行。
- 13:06 母グマに発砲。子グマ 2 頭は逃走。その場で待機。
- 13:30 戻ってきた子グマ 2 頭に発砲。全 3 頭の死亡を確認。
- 13:33 ヒグマの捕獲場所付近で被害者を発見。
- 14:40 被害者をヘリに収容。その後、病院に搬送。
- 15:17 被害者の死亡を確認。
- 15:28～15:45  
捕獲したヒグマをヘリでピックアップ（ホイスト）し、知床五湖経由で鳥獣保護区管理センターに搬出。計 2 便で搬出完了。
- 15:49 捜索救助隊（本隊）が下山開始。
- 16:17 捕獲したヒグマ 3 頭の計測および解体と試料採取を実施。
- 16:30 五湖・カムイワッカ・各登山道について翌 16 日の閉鎖継続を確認。
- 17:15 捜索救助隊（本隊）が岩尾別温泉登山口に下山。解散。  
現地リエゾンも順次撤収。
- 18:00 斜里町 web サイトで事故情報の第 4 報を発出。

#### 8 月 16 日（土）

- 硫黄山登山口に下山する登山者対応に備え、カムイワッカに斜里町により人員配置。  
下山者は確認できず。
- 北海道の依頼を受け、北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所（以下、道総研という。）の研究員（2 名）が事故調査を実施（終日）。被害者の同行者、斜里警察、知床財団等への聞き取り調査を実施。併せてクマの DNA 分析用の試料を遺留品等から回収。

- 当面の登山道の閉鎖継続を確認。登山口の掲示等の確認、パトロールの実施。

8月17日（日）

- 知床五湖の高架木道の利用再開（地上遊歩道は閉鎖継続）。
- カムイワッカ湯の滝のぼりの利用再開。シャトルバス運行。

8月18日（月）

- 知床五湖地上遊歩道の利用再開。

8月19日（火）

- 北海道庁より道総研による DNA 分析の結果をプレスリリース（詳細は 4.3 を参照）。

8月20日（水）

- 関係機関による現場検証（1回目）の実施（詳細は 4 章を参照）。

8月21日（木）

17:00 斜里町対策本部廃止。

## 4 事故調査と分析

本章では、本件事故の発生以降に実施した事故調査の結果を示し、その分析を行う。事故調査の実施概要を表 4-1 に示す。

月日	目的および実施概要	実施者
8月15日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 搜索救助活動と併せた遺留品の回収</li><li>・ 捕獲個体の解剖およびサンプリング</li></ul>	北海道警察、知床財団 有害鳥獣捕獲従事者（猟友会員）
8月16日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 同行者および搜索救助隊への聞き取り調査</li><li>・ 遺留品からのサンプリング</li></ul>	道総研
8月20日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 事故の現場検証、事故発生地点の特定</li><li>・ 遺留品の搜索、ヒグマ痕跡の搜索</li></ul>	環境省、北海道、斜里町 羅臼町、標津町、知床財団 北海道警察
9月3日	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 事故の現場の検証、搜索救助活動の現場確認</li><li>・ 遺留品の搜索</li></ul>	環境省、知床財団 道総研

表 4-1. 事故調査の実施概要

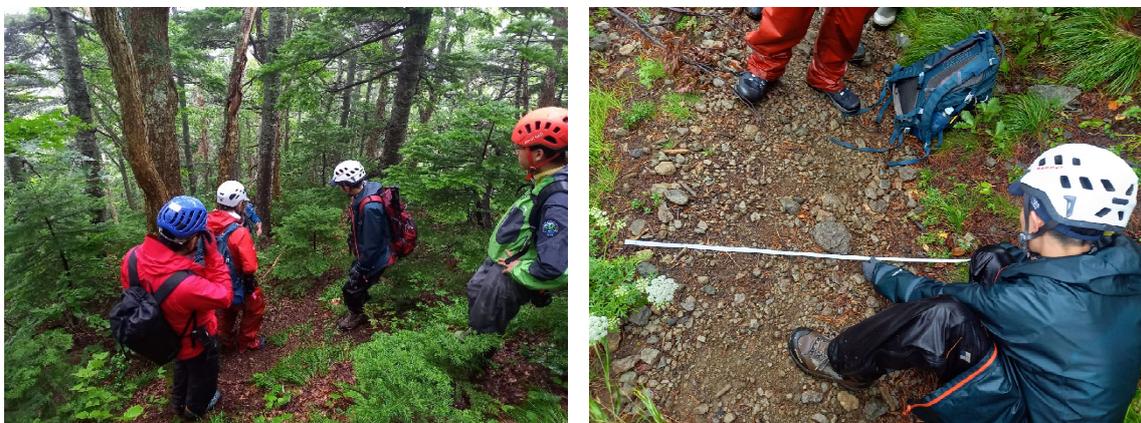


写真 4-1. 事故調査の実施風景(9月3日)

## 4.1 事故発生現場

### 4.1.1 事故発生の時刻と場所

#### 事故発生日時

2025年8月14日 午前11時00分頃（精度±10分）

#### 事故発生場所

登山コース上の位置：羅臼岳登山道（岩尾別コース）上の通称560m岩峰付近であり、登山口となる岩尾別温泉から約1,400mの距離で、1時間程度の所要時間である（図4-1）。

住所：北海道斜里郡斜里町遠音別村

緯度経度：北緯 44.103733° 東経 145.097905°

標高：559m

#### 保護区等指定

知床世界自然遺産地域 A 地区

知床森林生態系保護地域 保存地区

知床国立公園 第2種特別地域（保護規制計画）、羅臼岳登山線道路（歩道）（利用施設計画）

国指定知床鳥獣保護区

### 4.1.2 事故発生前後の天候

事故発生地点からおよそ2.5km離れた知床五湖（標高230m）に設置された気象観測機の記録データによると、11時ごろの気温は27.0度で雨量はゼロ。風速（10分平均）は1.0m/s以下であった。照度は約90,000lxであり晴天に近い水準であった（図4-2）。

これらのデータから現場付近の天候は晴れまたは薄曇りで降雨などはなく、視界も良好であり、行動に支障のあるような風もなかったものと推定される。

なお、当日は11時ごろから天気が悪化傾向に転じており、同じく知床五湖のデータによれば午後1時以降の平均風速は3m/s前後で午後2時45分には最大瞬間風速11.4m/sを記録している。また、午後8時には少雨も観測されている。

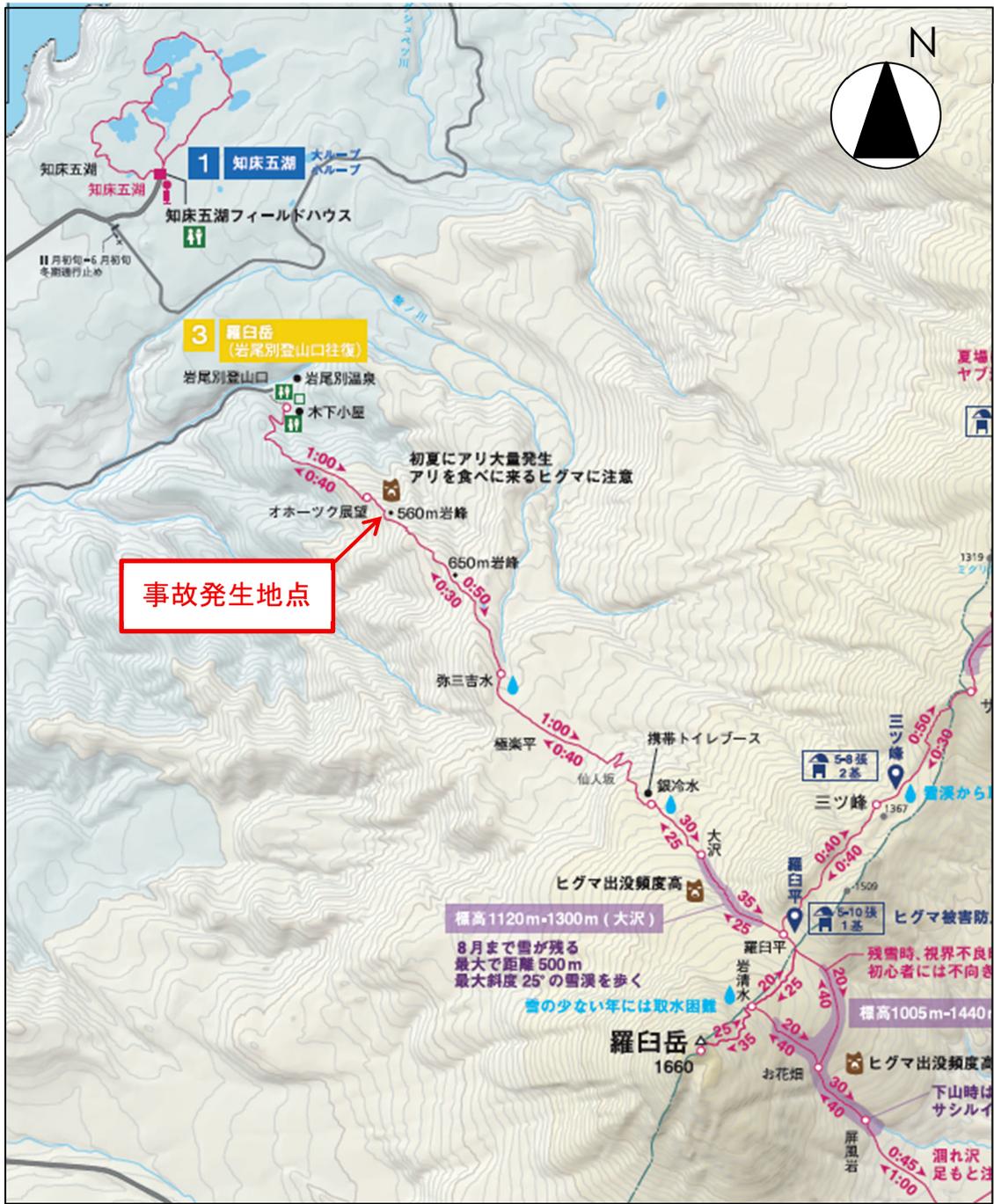


図 4-1. 羅臼岳登山道(岩尾別コース)の概要と本件事故の発生日点

知床連山エリア MAP(知床財団発行)を使用

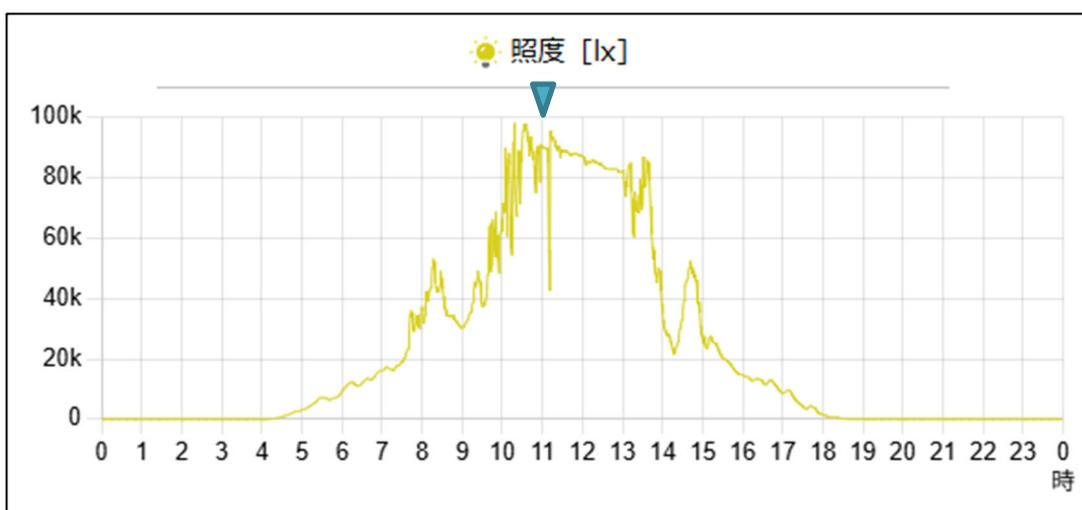
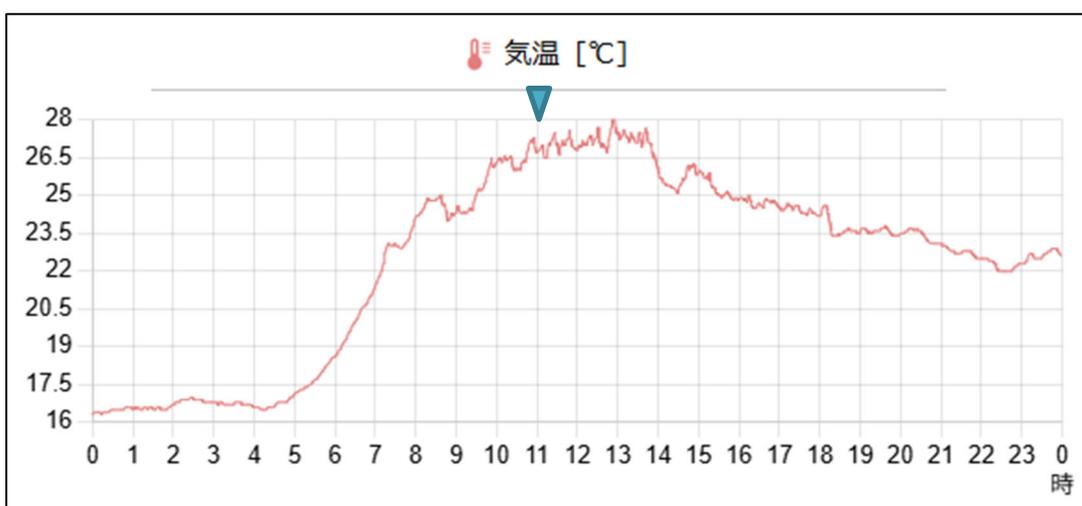
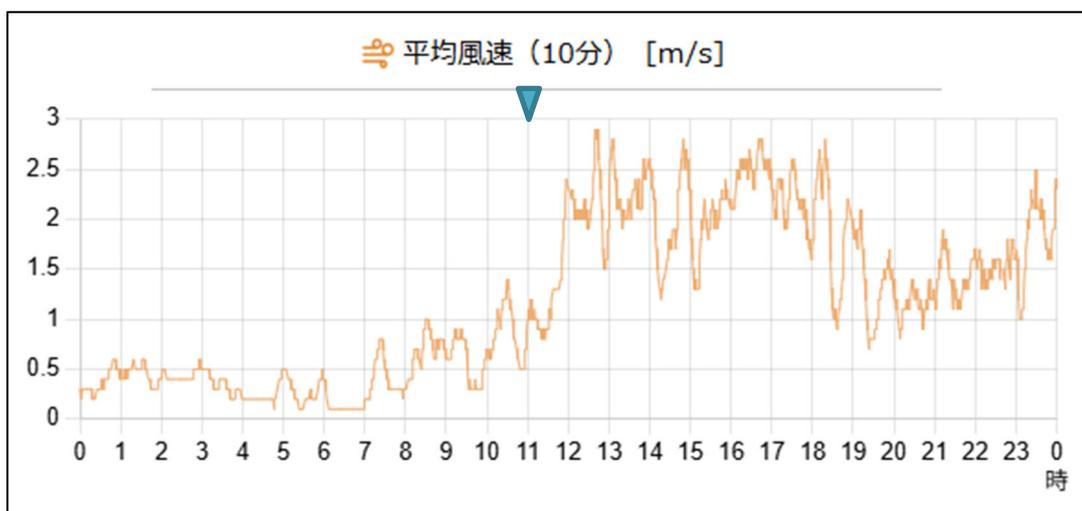


図 4-2. 知床五湖における気象観測データ(8月14日の24時間データ)

#### 4.1.3 事故発生地点の環境(図 4-3)

本件事故の発生地点は、事故調査によりほぼ正確に確定した。山頂から登山口に向かって進むと(下山方向、以下の説明も同様) 560m 岩峰の基部にぶつかり、小広場となっている。ここから登山道は岩峰の南側を巻くように配置されており、45m の直線区間を経て右側にゆるくカーブしている。このカーブの先で被害者は加害個体と遭遇したと推定される。

この区間はほぼ平坦であり、幅員は約 110 cm と狭い。左側は急峻な谷で直下の傾斜は 40 度程度であり、その下部も平均 30 度程度の傾斜が続く。林内はハイマツやダケカンバなどが密生しており見通しは効かないが、下層植生は薄く林床は見えている場所が多い。右側は岩壁が迫っているが、低木類が覆いかぶさるように生育しており視認できない。

560m 岩峰付近は、夏季にはヒグマのエサとなるアリが恒常的に発生する場所である。アリの摂食を目的としたヒグマの出没が多発する場所として知られており、事故発生地点を横切る獣道を確認した。なお、8 月 15 日の現地搜索時、および 8 月 20 日の事故調査時においても多量のアリの発生を確認している。

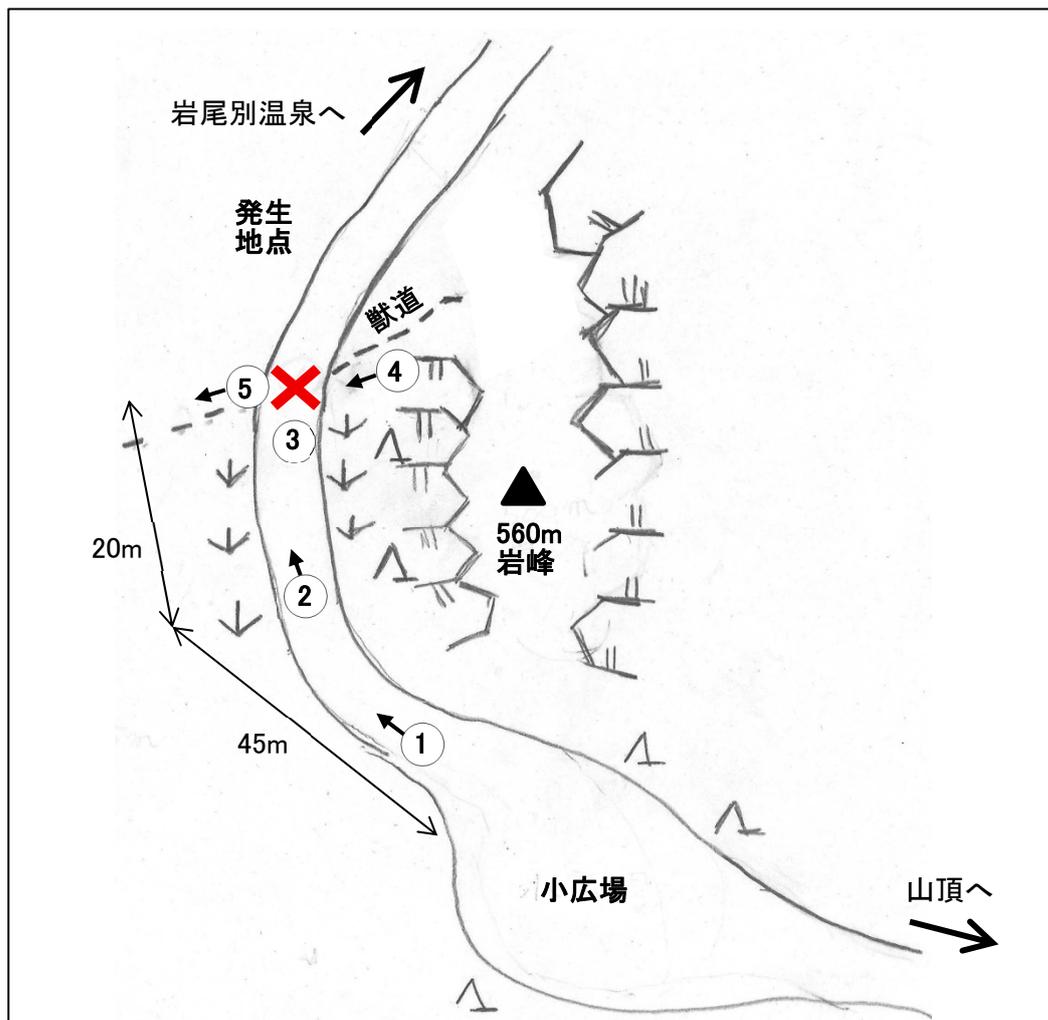
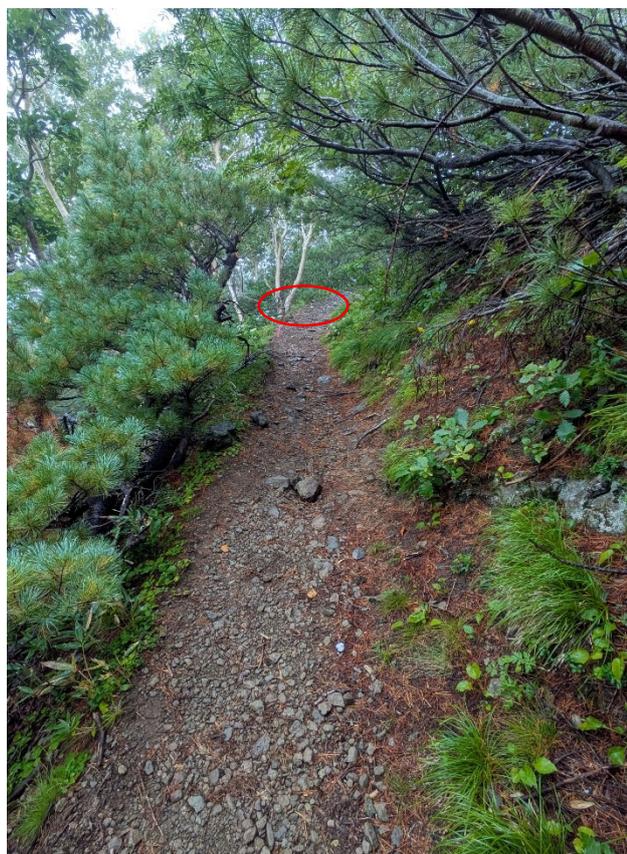


図 4-3. 事故発生現場見取り図。図中の番号は次頁の写真番号に対応する。矢印は撮影方向を示す。



写真①小広場から事故発生地点方向。右側にゆるくカーブしており、発生地点は見えない。



写真② 事故現場より15m~20m 山頂側。  
発生地点を見通すことができる(赤丸)。



写真③ 事故発生地点。歩道を横断する獣道(白線)がある。



写真④ 獣道から登山道を見下ろす。



写真⑤ 事故発生地点から谷側を見下ろす。

## 4.2 事故の経過と事故調査

道総研による聞き取り調査や現地調査の結果から事故発生後の重要情報を以下にまとめる。事故経過と事故調査に関わる位置情報を図 4-4 に示した。

### 4.2.1 事故発生時

- 事故発生時、被害者の近くに同行者および第三者はおらず、事故時の被害者の行動やヒグマによる被害者への攻撃の瞬間は誰も直接目撃していない（図 4-4 a 地点）。
- 被害者は同行者から離れ、200m 程度先行していた。同行者の位置は図 4-4 の b 地点と推定されるが確度は低い。事故発生時、移動速度なども不詳であるが、同行者の登山アプリの活動記録によれば、早めのペースで行動していたことは確かである。
- なお、いわゆる「トレイルランニング」と呼ばれるスタイルを志向した登山ではない。
- 被害者はクマ鈴を携行していた。クマ撃退スプレーの携行は不明である。その後の調査においても所持や使用に関する情報はなく、所持していなかった可能性が高い。

### 4.2.2 事故発生後

- 同行者は、被害者の助けを呼ぶ声で事故の発生を知覚し、登山道から外れて林内斜面を下り、ヒグマに襲われている被害者を林内に発見した（図 4-4 c 地点）。この際、同行者が確認したヒグマは 1 頭との情報である。
- 同行者は応戦と救助を試みたが、ヒグマは被害者から離れなかったため、携帯電話の通じる登山道上に移動し、警察へ通報を行った（通報時間 11 : 10）。
- 同行者は強力催涙スプレー（ヒグマに対応した製品ではない）を所持していたが、使用履歴が不明のものだった。事故発生の際に使用を試みたが、噴射できていない。登山開始時にすでにほぼ空の状態だった可能性がある。

### 4.2.3 被害者の搜索救助活動と事故調査

#### 8月15日

- 事故発生地点から谷側林内（図 4-4 e 区域、写真 4-2）を搜索し、被害者の所持品、着衣、ザックなどを発見し、回収した。
- 13 時 06 分頃、被害者に接触している 2 頭の子を連れた親子ヒグマを発見した（図 4-4 f 地点、写真 4-3）。最初に母グマに発砲し、その後、ほぼ同地点で子グマ 2 頭に発砲し捕獲した。被害者は病院に搬送され、その後死亡が確認された。
- 捕殺したヒグマは現場から搬出され、同日中に計測および DNA 調査のためのサンプリングを含む試料採取を行った。

#### 8月20日

- 事故調査を実施し、登山道上でのヒグマと被害者の遭遇地点を特定した。
- 事故発生地点付近の谷側林内でスマートフォンなどの遺留品やヒグマの体毛を追加で発見し回収した（図 4-4 g 地点）。

9月3日

- 事故の現場検証を行った。事故現場の測量や捕獲現場等の確認を行った。
- 遺留品の捜索を行ったが成果はなかった。その後の聞き取りにより、想定される遺留品はすべて回収できていることを確認した。

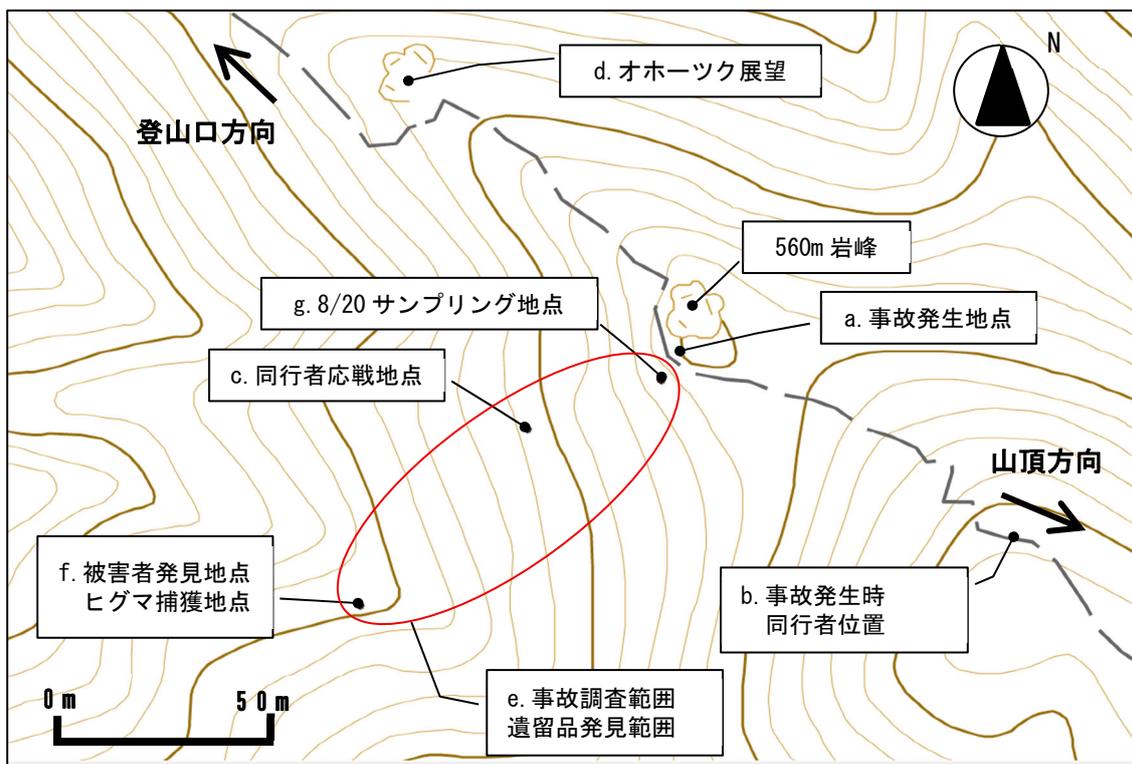


図 4-4. 事故経過と事故調査に関わる位置図。ベース地図は国土地理院地図を使用した。



写真 4-2. 捜索区域の様子(9/3 撮影)



写真 4-3. ヒグマの捕獲地点(9/3 撮影、赤丸で示す)

#### 4.2.4 その他登山者の動向と救助活動

##### 当日の登山利用の状況

- 当日の岩尾別コースの登山者数は赤外線式のカウンターのデータ<sup>7</sup>によると 63 名である（速報値）あるが複数の登山口から延びる登山道が稜線で接続しており、宿泊による利用者もあるため、山中の登山者を正確に把握することは困難である。
- モニタリングを目的として岩尾別温泉登山口に設置された赤外線式のカウンターのデータによる今年度7月から8月14日までの日別の入山者数を図4-5に示す。また、カウンターデータの分析から、同登山口における入山時間のピークは午前4時から5時、下山時間のピークは午後1時から3時との結果が得られている。

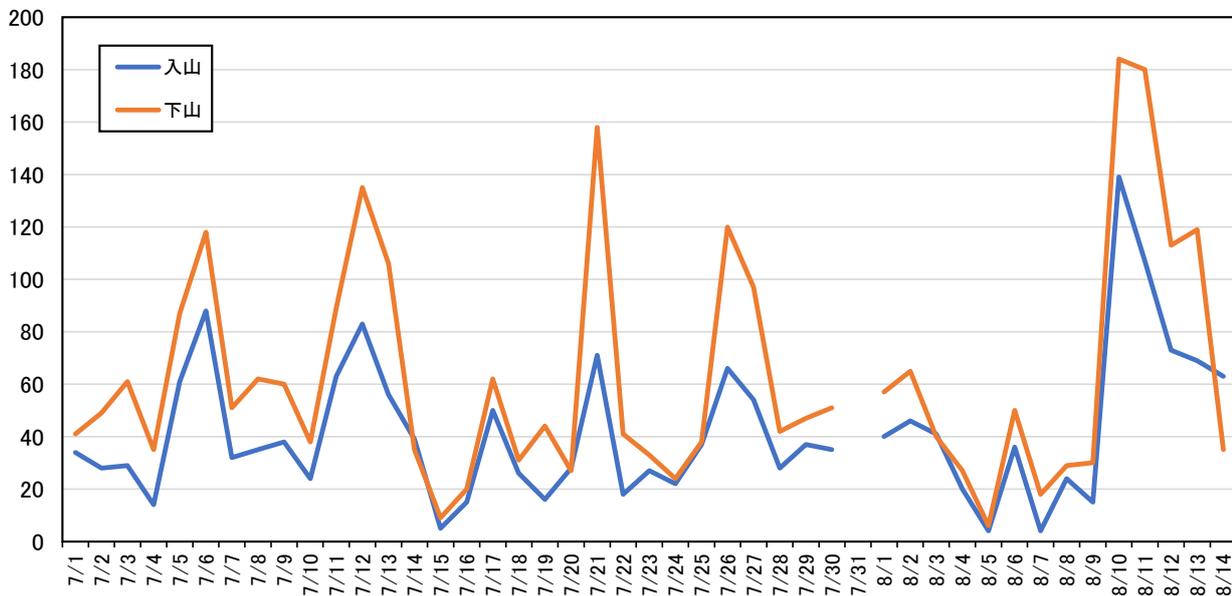


図 4-5. 2025 年 7/1 から 8/14 までの岩尾別温泉登山口の入減者数

##### 残存登山者の救助活動

- 2次被害の防止を主眼として、事故発生直後よりヘリコプター3機を用いた残存登山者の救助活動が警察と消防の連携により進められた。
- 事故発生時、同日の入山者の大多数は山中に滞在中であり、その大半は羅臼岳登頂後の下山中であつたと想定される。
- 被害者の同行者が通報後に救助を待っていたオホーツク展望（標高 490m）に次々と下山者がさしかかり、事故の発生を認知し、滞留することで事実上の救助（ホイス）地点になったものと推定される（写真 4-4）。
- 同地点で滞留する登山者は、事故情報やヘリによる救助方針を口伝やメモで伝え合い、

<sup>7</sup> 赤外線式カウンターは、機材特性により利用者数が過少に算出されることがある。また、入山者数と下山者数に大きく開きがあるのは、縦走者が一方向しか記録されないことと機械的な不調の可能性がある。

順番待ちをしていたことが報告されている。

- 結果的にヘリによる救助者は71名となり、活動終了時刻は日没時刻（18:27）間近の18:00ごろだった。
- 救助地点と事故発生地点が近く、2次被害防止の観点から残存登山者の救助活動が終わるまで地上の捜索救助隊は待機となり、結果的に被害者の捜索救助活動は明朝から開始となった。



写真 4-4. ヘリによる救助地点となったオホーツク展望。ホイスト(吊り上げ)地点を赤丸で示す。

### 4.3 捕獲個体の情報および加害個体との関係性

#### 4.3.1 捕獲個体について

##### 個体1

性別	メス、親	年齢	11歳（現地のモニタリング記録から特定された出生年より算出）		
体重	117.4kg	体長	140.0 cm	標識等	なし
その他	モニタリングのための識別記号 <sup>8</sup> ：SH 特徴的な胸部斑紋があり、観察による識別が容易なため、モニタリング記録が豊富。				

##### 個体2

性別	メス、子	年齢	0歳（外見からの推定）		
体重	17.3kg	体長	72.0 cm	標識等	なし
その他					

##### 個体3

性別	オス、子	年齢	0歳（外見からの推定）		
体重	17.0kg	体長	72.5 cm	標識等	なし
その他					

#### 4.3.2 捕獲個体と加害個体の関係

- 捕獲個体と本件事故との関係を分析するため、北海道ヒグマ対策室からの依頼を受けた道総研がDNA分析を実施。被害者の着衣および遺留品等に付着したヒグマの体毛や唾液から抽出したDNAと、捕獲個体（親個体）の肝臓から抽出したDNAが一致した（8月19日北海道庁プレスリリース）。
- 8月20日に実施した現地調査において事故発生地点付近で未回収であった遺留品のほか遺留品に付着したヒグマの体毛およびその直近で発見されたヒグマの体毛を回収した（図2-4g地点）。回収したヒグマの毛と、遺留品から採取した唾液を試料として追加的にDNA分析を実施した結果、捕獲個体（親個体）のDNAと一致した。
- 事故調査において実施された一連のDNA分析において、捕獲個体以外のヒグマのDNAは検出されていない。捜索救助、現場検証等の事故調査においても、捕獲個体以外のヒグマが本件事故に関与した情報は得られていない。

<sup>8</sup> 調査や管理のため、識別されたヒグマには識別記号（ID）が付与される場合がある。調査の主体や目的により識別記号の整理方法は異なる。同一個体が複数の識別記号を有することもある。

#### 4.3.3 捕獲個体の識別と履歴

捕獲個体の DNA 情報と外見的特徴から個体の識別を実施した。知床財団によるヒグマ対策記録や研究機関によるヒグマ DNA 調査等により把握している個体識別情報と捕獲個体の情報を突合した結果、以下のことが明らかとなった。

- 捕獲個体は、2014 年（出生年）から知床国立公園で毎年のように目撃されてきた。特に、岩尾別地区を中心に活動し、今年度も 5 月頃から同地区を中心に目撃されており、2 頭の出生も確認されていた（写真 4-5）。
- 捕獲個体は、国立公園内の道路沿線など人目につく場所で繰り返し目撃されており、今年に入り当該親子グマと思われるヒグマの目撃情報が 30 件以上寄せられていた（道路沿線での最後の目撃は 8 月 8 日）。
- なお、8 月 10 日には羅臼岳の登山道付近で当該親子グマと思われるヒグマの目撃情報が登山者より寄せられている<sup>9</sup>。
- また、「人を避けない。人に会ってもすぐに逃走しない。」といった行動段階 1 から 1+ に該当する行動<sup>10</sup>が度々確認されており、これらの行動を抑止するため、捕獲個体への追い払い対応（忌避学習付け）を繰り返し行ってきた経過がある<sup>11</sup>。
- 捕獲個体に関して、餌付けされたかのような情報が一部で出回っているが、そのような事実は確認されていない。なお、7 月 29 日に岩尾別地区でヒグマへの餌やりが疑われる事案が発生<sup>12</sup>しているが、通報された場所や目撃された個体の特徴から、捕獲個体との関係性は低いとの調査結果を得ている。
- 一部報道において当該個体の愛称に関する記事があるが、知床財団および行政機関がそのような愛称・呼称を用いた事実はない。



写真 4-5. 岩尾別地区で目撃された捕獲個体。7 月 27 日知床財団撮影。

<sup>9</sup> 道路沿いなどの低標高で活動するヒグマが夏季に山岳地域に移動することは一般的な行動。

<sup>10</sup> 知床半島ヒグマ管理計画に基づくヒグマの行動段階の区分による。

<sup>11</sup> 「人を避けない。人に会ってもすぐに逃走しない」ヒグマは知床半島全域で多数確認されており、捕獲個体の際立った特徴とはいえない。

<sup>12</sup> 7 月 30 日 Web サイト「知床のひぐま」および SNS において発出。

<https://brownbear.shiretoko.or.jp/news/news-1246.html>

## 4.4 事故発生以前に登山道で確認された要注意事例とその対応

### 4.4.1 今年度の岩尾別コースにおける要注意事例

登山道でのヒグマ目撃情報は例年多数寄せられており、今年度の目撃情報の件数は平年並の水準だった(7月末時点で24件)。今年度の岩尾別コースにおけるヒグマ目撃情報について、特に注意が必要と考えられる事例を表4-1に整理した。

整理番号	日時	概要
1	7/21 9:00	560m 岩峰付近、単独亜成獣サイズ。登山道上でヒグマと遭遇。遭遇距離約 5m。詳細な遭遇状況不明。
2	8/3 14:00	登山口～弥三吉水間。単独成獣サイズ。登山道上でヒグマと遭遇。遭遇距離約 2m。移動していたクマが目撃者についてきた。その後ゆっくり離れていった。
3	8/10 13:00	岩尾別コースの 銀冷水(1,040m)～大沢(1,120 m)間の登山道上で0歳の子グマ2頭を連れた親子グマが目撃される。この親子グマは利用者を気にせず登山道を登ってきたため、登山者(別パーティのガイド含む)がクマ撃退スプレーを構えて後退する事態となった(スプレー噴射なし)。提供写真による外見上の特徴から、この親子グマは今回の捕獲個体と同一である可能性が高いと推察される。加えて、同様の目撃アンケート5件が複数のパーティから上げられた。
4	8/12 8:30	弥三吉水(780m)～ 銀冷水(1,040m)間の登山道上で単独の成獣サイズのヒグマ(外見特徴:濃茶色、体毛長め)が下山中の登山者によって目撃された。目撃者に接近したことからクマ撃退スプレーが使用されているが、使用量は微量である。この個体は目撃者から一時離れたものの、遭遇から退避まで約5分間にわたって接近と離反を繰り返す行動を見せた。後日、目撃者から「報道で見た8月10日に羅臼岳で目撃されたヒグマの特徴と似ていた」との情報提供があった。

表 4-1. 岩尾別コースにおける要注意事例一覧

#### 4.4.2 要注意事例への対応状況

- 8月10日、8月12日の要注意事例について、通報者からの聞き取り調査を行うなど、詳細把握に努めた。
- 8月12日の要注意事例については、通報者から聞き取り調査を行った知床財団が知床ヒグマ対策連絡会議の構成機関へ即時に情報共有し、ヒグマ管理計画に基づき、登山者への強い注意喚起または登山道の利用自粛要請、現地調査による追加的な情報収集を行う必要性について打診した。その後、知床ヒグマ対策連絡会議での協議の結果、登山口への注意喚起の掲出、Web 媒体等での注意情報の発信を行うとともに、一般登山利用者からの情報であったことから、登山道のパトロールを行うこととした。
- 8月12日午後には、web サイトと SNS で注意情報<sup>13</sup>を発出するとともに（図 4-6）、登山口に要注意事例の内容と、クマ撃退スプレアの携行を強く推奨する「要注意ヒグマ目撃情報」を示す注意喚起看板を掲示した（図 4-7、写真 4-6）。
- より詳細な情報を把握し、追加的な対策の必要性を確認するため、8月13日早朝から午後にかけて環境省職員、斜里町職員、知床財団職員が合同で、当該個体の駆除も視野に、岩尾別登山口から大沢入口までの登山道のパトロールを実施した。パトロールの際に、登山道上で出会った登山者への周知及び聞き取りも行ったが、要注意事例に関連する情報やヒグマの目撃情報は得られなかったことから、注意喚起を継続することとした。

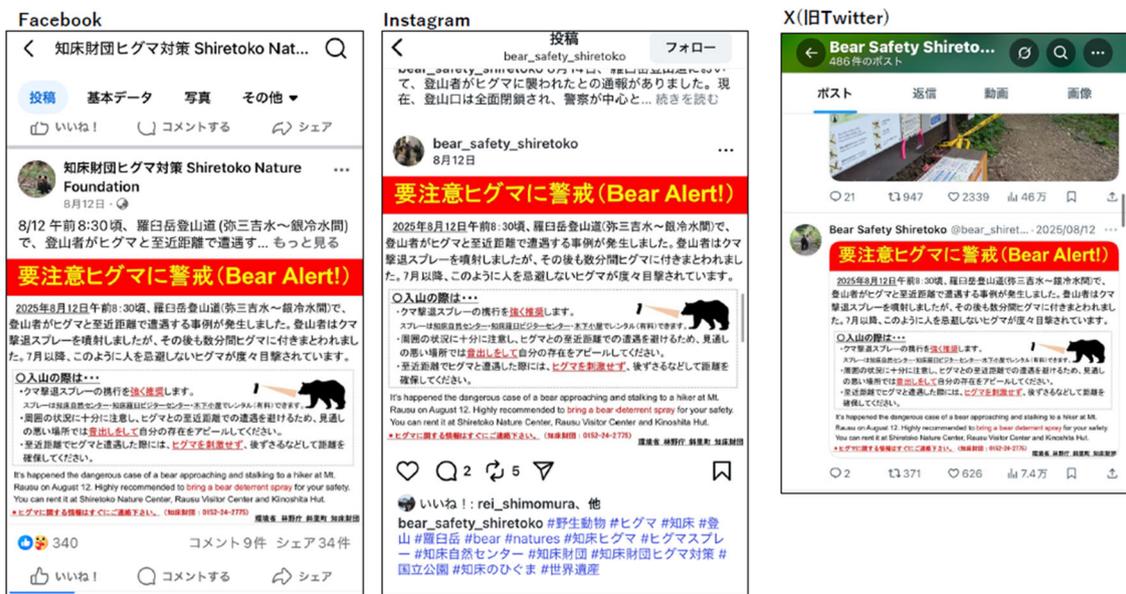


図 4-6. 8月12日にSNSで発信した警戒情報の内容。

<sup>13</sup> 8月12日 Web サイト「知床のひぐま」およびSNSにおいて発出。  
<https://brownbear.shiretoko.or.jp/news/news-1261.html>

## 要注意ヒグマに警戒 (Bear Alert!)

2025年8月12日午前8:30頃、羅臼岳登山道(弥三吉水～銀冷水間)で、登山者がヒグマと至近距離で遭遇する事例が発生しました。登山者はクマ撃退スプレーを噴射しましたが、その後も数分間ヒグマに付きまといられました。7月以降、このように人を忌避しないヒグマが度々目撃されています。

### ○入山の際は…

- ・クマ撃退スプレーの携行を**強く推奨**します。

スプレーは知床自然センター・知床羅臼ビジターセンター・木下小屋でレンタル(有料)できます。

- ・周囲の状況に十分に注意し、ヒグマとの至近距離での遭遇を避けるため、見通しの悪い場所では**音出しをして**自分の存在をアピールしてください。
- ・至近距離でヒグマと遭遇した際には、**ヒグマを刺激せず**、後ずさるなどして距離を確保してください。



It's happened the dangerous case of a bear approaching and stalking to a hiker at Mt. Rausu on August 12. Highly recommended to **bring a bear deterrent spray** for your safety. You can rent it at Shiretoko Nature Center, Rausu Visitor Center and Kinoshita Hut.

\* ヒグマに関する情報はすぐにご連絡下さい。(知床財団: 0152-24-2775)

環境省 林野庁 斜里町 知床財団

図 4-7. 8月12日に登山口に掲示した注意喚起情報の内容。



写真 4-6. 岩尾別登山口における警戒情報の掲出状況(8月13日撮影)。

## 5 事故の原因

### 5.1 直接要因

一般的に、ヒグマによる人身事故の要因は、①若い個体による興味本位の接近やつきまといからの攻撃 ②突然の遭遇や子や食物を守るための防御的攻撃 ③積極的攻撃・捕食行動の3つに区分できるとされる<sup>14</sup>。4章における分析の結果を踏まえると、本件事故は、①の要因は該当せず、②と③の要因が可能性として考えられる。

#### 防御的攻撃の可能性

- 事故発生現場周辺の登山道（オホーツク展望～560m 岩峰）は、かねてから夏期にアリの採食するヒグマがたびたび出没するエリアとして、注意喚起が行われている場所であった。（4.1.3）
- 事故発生時、被害者は同行者から 200m 程度離れていたことから、単独での行動となっていた。登山道が狭くカーブする見通しの悪い場所を早めのペースで下山していた可能性も否定できない。（4.2.1）
- 加害個体は、しばしば登山道や道路上に姿を見せ、人や車が近づいてもほとんど気にしない行動が繰り返し確認されており、事故発生数日前にも、事故現場付近の登山道上で確認されている。人に対する警戒心が極めて低かったと考えられる。また、子連れの親グマは一般的に防御的な攻撃性が高いことが知られている。（4.3.3）

これらのことから、アリの採食等を目的に見通しの悪い登山道付近に滞留していた加害個体やその子に突然の遭遇、もしくは急接近したことが、加害個体による防御的な攻撃行動に結び付いた可能性が高いと考えられる。

#### 積極的攻撃・捕食行動の可能性

- 一般的に防御的な攻撃による場合、その行動は短時間で収束する傾向にあるが、本件事故においては、同行者が反撃をしたにも関わらず、被害者を離さずかなり遠方までひきずるなどの執着をみせた。（4.2.3）
- 事故発生の2日前（8/12）に岩尾別温泉登山道では、人につきまとうヒグマが確認されていた。（4.4.1）

これらの情報から、加害個体が積極的に被害者に近づき意図的な攻撃を行った可能性は否定できない。しかしながら、以下の点については留意が必要である。

- 8月12日に発生したつきまといの事例は、加害個体と同一個体であるとの確度の高い証拠は得られていない。
- 加害個体の行動履歴からは、人や車が近づいてもほとんど気にしない行動が繰り返

<sup>14</sup>釣賀一二三（2019）ヒグマによる人身事故の分析と対策,ヒグマの会ニュースレター,gen3-vol.3,pp5-6.

し確認されているが、攻撃的な行動（ブラフチャージなど）は確認されていない。また、餌やりなどがあった直接的な証拠も得られていない。（4.3.3）

今回の事故では、被害者がすでに死亡しており、加害個体との遭遇時や攻撃発生時の目撃者もいないことから、同行者からの聞き取り情報や事後調査の情報などから要因を推測する以外に、明確な発生原因を特定することはできなかった。防御的、積極的という要因についても明確に区分できるものではなく、防御的な攻撃がエスカレートし積極的な攻撃に転化するなど複合的な要因の可能性も考えられる。

## 5.2 間接要因

### 5.2.1 ヒグマ生息地における安全対策や装備、事前の情報把握

本件事故発生時には、被害者はクマ鈴を携行していたが、早めのペースで単独行動の状態となり、クマ撃退スプレーの所持や使用は確認できなかった。また、同行者の所持していた強力催涙スプレーも有効に使用することができなかった（4.2.2）。

### 5.2.2 ヒグマリスクの周知と認知

SNS、web サイト、岩尾別温泉登山口にはヒグマの目撃情報、注意喚起の情報が掲示されていたものの、(2.5.1,4.4.2) これらが十分に認知されていなかった可能性が高い。同行者への聞き取り結果からは、web サイト上のヒグマ情報については事前に閲覧しておらず、登山口に掲示されたヒグマ情報について、同行者は確認（流し読みする程度）していたものの、直前の注意喚起情報（図 4-7）については特に記憶に残っておらず、被害者ともヒグマ対策について話題に上がることもなかったとの証言が得られている。

### 5.2.3 利用自粛や登山道の閉鎖措置

8月12日の要注意情報を受け、13日には関係機関でパトロールを行ったものの、ヒグマの姿や明確な痕跡、誘引物は確認できなかったことから、注意喚起を継続することとし、登山口は閉鎖されなかった（4.4.2）。

## 5.3 背景事象

### 5.3.1 人とヒグマとのあつれきの増加

知床地域ではヒグマの生息密度が極めて高く、目撃・遭遇の件数も登山道沿線に限らず増加傾向にあり、人とヒグマとのあつれきが大きな地域課題となっている（2.3.2）。

知床半島の推定ヒグマ個体数は、2020年時において約400頭であったが、2023年の大量出沒とこれに伴う捕獲（185頭、うちメスは116頭、オスは69頭）により、大幅に減少したと推定されるが、観光等利用者の問題行動に起因する危険事例の発生件数は減少していない。

あつれきが多く発生する要因として、人を恐れない、人を積極的に避けない、いわゆる

人なれした個体の増加といったクマ側の行動変化がある。これに加え、クマに興味を持つ利用者、クマを恐れない来訪者により、写真撮影等のための過度な接近や餌付けといった人なれを増長させる不適切な行動が課題となっている。

知床半島ヒグマ管理計画では、人前に繰り返し出没し、行動が改善されない個体を「行動段階 1+」の問題個体として、特に市街地周辺等においては基本的に捕獲をしているが、計画対象地域においても従前から「行動段階 1+」の個体による問題の発生が継続している。本件事故における加害個体も「行動段階 1+」の個体であったことが、駆除後の DNA 鑑定により明らかになった (4.3.3)。

### 5.3.2 知床世界自然遺産利用者全体への情報提供

これらの問題に対応するため、関係機関が連携し、人と野生動物との正しい距離感を普及するため「知床ディスタンス！キャンペーン～#ニンゲンもクマも距離感が大切～」を 2020 年から継続的に実施している。本キャンペーンでは、野生動物との正しい距離感を伝えるための「ディスタンスカード」などの普及啓発ツールの配布や、交通安全活動の実施などを通じて、野生動物への餌付け禁止や接近禁止のルールを普及を図っている。

来訪者に対しては、各ビジターセンター等で出没状況等について情報提供を行っているほか、知床財団が運営するウェブサイト「知床のひぐま」や「知床情報玉手箱」、SNS (Facebook, X, Instagram) 等を通じて情報発信を行ってきた (2.5.1)。

しかしながら、ヒグマ対処方法やルールは普及啓発による周知が基本であり、ヒグマのリスク管理は利用者自身の判断に委ねられてきた。こうした取組みにより発信した情報が来訪者に認知され、実際の行動変容につながっているかどうかは評価できていない。

加えて、2022 年の自然公園法の改正により人間側からの接近・つきまとい等の行為に対する規制が強化され、現場では当該規制を踏まえた巡視や注意指導が行われてきたが、規制が抑止力として機能したとは言い難い状況であった。

### 5.3.3 クマ対策人員の逼迫

人なれ個体の発生抑制やあつれきの解消などのクマ対策は、出没情報の把握・発信、問題個体の確認・追い払い・捕獲、誘引物除去、市街地での対応、利用者への指導・巡視など年間を通じ業務が多岐にわたり多大で、慢性的に人員不足である。また、今回の事故は年間で最も観光客が多い繁忙期に発生し、各所でのヒグマ対応に追われ現場での対応人員が逼迫していた。

## 6 事故対応の検証

登山者への情報提供や日常的な登山道管理、ヒグマ対策といった受入れ側（地域や管理者）によるリスクマネジメントの観点から本件事故の対応を検証する。

### 6.1 登山利用者への情報提供・注意喚起のあり方

登山道における問題個体確認後の登山者への情報提供・注意喚起については、以下のような課題が考えられる。

- 日常的なヒグマ情報の発信は知床全域で取り組まれているが、ヒグマ生息地における登山の行動規範（単独での行動や早いペースでの移動を避けるなどヒグマに出会わない行動、クマ撃退スプレアの携行、ゴミや食料の管理等）については、十分に認知されず行動変容に至っていない可能性が高い。
- 登山口での掲示板は、複数機関により多岐に渡る情報が入り混じった状態で掲示されており、重要な情報、安全に係る情報を利用者が認識しづらい状況となっている。
- ビジターセンターでは情報提供、マップの販売、クマ撃退スプレアのレンタルなどを行っているが、開館時間や案内人員には制約がある。
- 危険事例を踏まえた注意喚起情報についても、同行者からの聞き取りによれば効果的に認知されていなかった
- 登山者が危険情報を受け取っても行動を変えにくい、いわゆる“正常性バイアス”や「多くの登山者がいる＝安全である」と誤認しやすい心理的傾向を持ちやすい可能性がある。こうした傾向は、注意喚起の効果を弱め、リスク情報が行動の見直しや装備の準備に結び付きづらい背景となりうる。
- 行動変容に影響する情報提供のあり方の観点として、登山者の情報収集や行程の検討・決定などのタイミングも考慮した情報提供が課題であることから、登山利用者に対し、計画段階においてヒグマ生息地における登山の行動規範を情報提供することと、注意喚起が確実に伝わる対策の実施が必要である。

### 6.2 登山道における問題個体確認時の対応

事前のヒグマ情報を的確に把握・評価し、ヒグマ管理計画に基づいた対策を行っていたかの観点である。

- 登山道におけるヒグマ情報は、主に登山者からの通報や報告、登山口における任意のアンケートなどにより把握されていた。こうした方法は、情報の網羅性や即時性が不十分な面もあり、報告内容の信頼性にもばらつきがある。今後は、重要情報をより確実に把握するためのフィードバック体制の強化が望まれる。
- 8月10日・12日に発生した要注意事例は、迅速に情報が把握され、関係機関に共有され、強い注意喚起が実施され、翌13日には関係機関でパトロールを行った。
- 13日のパトロールでは、ヒグマの姿や明確な痕跡、誘引物は確認できなかったため、

ヒグマ管理計画にもとづき、強い注意喚起を継続することとした。

- 注意喚起看板には、8月12日発生した事案の内容と、クマ撃退スプレーの携行を強く推奨したが、同行者への聞き取りによれば記憶に残る印象はなかったとのことであり、危機感を伝え行動変容を促す注意喚起の手法検討が必要である。
- 事故を踏まえて改めて見直しを行った結果、ヒグマ管理計画に基づいた対策を行うにあたって、以下のような課題が明らかとなった。
  - ① 伝聞情報や一度の目撃情報では問題個体としての評価（行動段階）が難しかった。
  - ② 複数の関係機関が関わる中で対応の判断や意思決定の手順が明確に共有できていなかった。
  - ③ 「利用の自粛」、「歩道等の閉鎖」などの対応については、その方法や手続きが明確ではなかった。
- 知床においては過去に、ヒグマの出没やつきまといが発生しているが、これまで羅臼岳登山道や他の歩道でも登山者及び観光客の人身被害につながるような事案はなく、登山者個人の対応や行動による回避に頼ってきた部分がある。
- 知床半島ヒグマ管理計画において、一般登山利用者からの伝聞情報に基づく危険性評価が難しい場合の意思決定の手順、危険事案が発生した際に登山口閉鎖等を行う際の基準や手順が具体的に定められておらず、これらを整理することが必要である。

## 6.3 事故発生時の対応

### 6.3.1 初動対応

- ヒグマ対策連絡会議で定めた「ヒグマ人身事故発生時の対応方針（2019年）」に基づき事故対応が行われ、事故情報が速やかに警察に通報され、事故情報や位置情報等も正確であった。事故対策本部の設置や遭難捜索体制も迅速であり、2次的な被害を防止できた。
- 一方、山岳遭難救助は、警察への通報で対応が始まり、事案発生后市町村を管轄する方面本部が現地指揮に当たり、道警本部は後方支援に当たることが一般的である。
- また、関係機関の協力体制として、現地指揮所にリエゾンを派遣し、そこに情報を集約し、必要な事項は協議するという形が取られ、今回は斜里町役場の事故対策本部が、現地指揮所となっていた。
- 現場では、遭難救助に当たる警察職員（リーダー）と加害個体の捕獲に当たる知床財団職員が、随時、状況判断、情報交換をしながら、各場面で体制、安全への配慮など決定し行動していた。
- 二次被害防止のため、ヘリコプターによる残存登山者の救助活動が行われたが、ヒグ

マ捕獲隊はその間待機とされ、現場での状況判断に関わることはなかった。

- 救助のホイスト地点は事故現場を通過した先の地点で行われたほか、同地点で同行者はヒグマと再遭遇しており（3.1）、ヒグマの行動などを踏まえた場合、安全性の面から改善の余地がある。
- 最盛期の登山者数を想定した場合、日没に間に合わなかった公算が強い。また、対象となる登山者数が不明であり、知床連山の登山道上には宿泊を伴う縦走利用者も複数組残存していたことが明らかとなっている。
- 残存登山者の救助に当たり、入下山状況の把握が緊急に必要なとなったが、登山計画書は任意提出で受付窓口が一本化されていないこと、今年度より個人情報取扱等の配慮から登山口に配置されていた入林簿が、電子形式での登山計画書に一本化されていたこと、登山情報アプリなど様々な情報ソースが存在することなどから、緊急に全数を把握することが困難であった。警察では登山計画書提出者（警察に提出されたものに限られる）に対して安否確認を行ったほか、独自の情報ソースにより登山者情報の収集に努めていた。
- 残存登山者のヘリコプター救助の間、被害者の捜索を目的とした地上の捜索隊は待機となり、結果として地上捜索が翌日となったことは、被害者救助とヒグマ捕獲の状況を大きく変えかねない重大な課題である。
- 結果として被害者の発見と加害個体の捕獲は翌日中に完了したが、天候その他要因によっては対応が長期化する可能性も高かった事案と考えられる。

### 6.3.2 事故調査

- 捕獲個体からの試料採取やDNA分析を含む、事故調査と現場検証などは関係機関連携の上、概ね迅速になされた。
- 警察・道総研・知床財団など複数機関による調査情報が散在したり、個人情報保護などの観点から共有が難しいなどの課題があった。

### 6.3.3 危機管理広報

- 危機管理広報（事故情報の公開、メディア対応、一般問い合わせ対応）については、事故対策本部の窓口以外の関係機関に多数の取材や問い合わせがあり、通常業務に支障をきたしたほか、統一的な取材対応ができなかった等の課題があった。
- 公式な事故情報の発信より先に、報道やSNS等での発信が先行し、事実と異なる情報や曲解された情報が流布し、それをソースとした情報が再発信されることでさらに混乱をきたす状況が見受けられた。
- マスメディアによるヘリコプター取材の飛行音が、現場捜索やヒグマ捕獲、事後の現場調査時に支障をきたしたため改善を要する。ヒグマが付近にいると見込まれる状態での捜索・駆除活動においては、ヘリコプターの爆音がヒグマの動きを示す音を聞き消すことに加え、現場での会話のほか、無線や電話等の情報伝達の妨げにもなるた

め極めて危険である。

- これらの課題を整理し、「ヒグマ人身事故発生時の対応方針（2019年）」を見直すことが必要である。

## 7 再発防止策

### 7.1 再発防止策の方向性

登山は、管理されていない自然の中で挑戦と達成感を得る余暇活動であり、それは事故につながる環境と裏腹である。山岳地には急峻な地形や落石、気象の変化や野生生物との遭遇など必ずリスクが存在する。登山にはリスクが根源的につきまとうことを考えれば、「安全に」活動するということはリスクを避けるのではなく、リスクのもとでいかにしてその影響を許容できる範囲に収めるかが重要であり、山のリスクマネジメントの出発点は、そのようなリスクの理解にある（村越真・宮内佐季子『遭難からあなたを守る 12 の思考』2022）。

登山道におけるヒグマ事故対策について、「知床ヒグマ対策連絡会議」及び構成機関が担うべき責任は、登山利用者に対して、統合的な情報を提供し、既知のリスクを開示・可視化し、共有することである。登山利用者は、情報を収集してリスクを把握し、自らの技量や装備を踏まえたうえで、「登る・登らない」の判断を行う。このことを明文化して登山利用者に周知することで、登山事故防止に対する姿勢を明確に示すこととする。

今回の事故は防衛的攻撃と積極的攻撃の両方の可能性があり、対応すべきリスクは「突然の遭遇」と「問題個体の存在」であるが、積極的に攻撃をしない個体であっても人になれた個体の存在は「人間との接近遭遇」のリスクを高めることから、突然の遭遇の回避と人なれ個体発生抑止の二つの対策をとる必要がある。

「突然の遭遇」については、登山道において突発的なヒグマとの人身事故を避けるために、ヒグマ生息地における登山利用者の行動規範（ヒグマとの突然の遭遇をさける行動、クマ鈴・クマ撃退スプレーの携行、ゴミや食料の管理等）、登山計画の提出等について明文化したウェブサイトを新設し、登山利用者の目線に立った情報提供を強化する。

「問題個体の存在」については、登山道に問題個体が確認された際の評価と対応フローを再整理し、行動や装備、登山計画の再考に資するようリスク評価に基づいた注意喚起を行う。また、危険事案が発生した際の登山口の閉鎖を含む対応の基準と手順を明確化する。なお、広大な山岳地域で得られる情報の量と質には限界があること、ヒグマは広範囲に移動し、行動は絶えず変化することから、ヒグマとの遭遇や事故のリスクを全て把握することは困難である。このため、登山口が閉鎖されていないことが安全を保障するものではない。登山道は野生動物の回廊を分断している場合もあり、常に遭遇リスクがあることについて、ウェブサイト等で明記する。登山口における集約的対応については、夏山シーズンの7月～9月を中心に実施する。

登山利用者は、事前にリスク情報を把握し、行動規範の確認、装備の見直し、登山計画の作成・提出を行い、知床自然センター・羅臼ビジターセンター・知床世界遺産センター、ウェブサイト・SNS や登山口で、直近の注意喚起情報を確認の上、最終的に「登る・登らない」の判断は自身で行うことを周知する。

なお、登山利用者に対する上記の主旨とクマ出没情報の周知の度合い、クマ撃退スプレー

の携行などの実態を見ながら、情報提供及び注意喚起の方法等は随時見直す。問題個体の出没とともに周知と理解は人身事故リスクを左右する重要な要因である。

背景と考えられる問題個体の発生抑止にも取り組む。2023年の大量出没を経て、個体数はかつてより減少していると推定されているが、軋轢は減少していない。このため、来訪者による餌付け、接近、つきまといなどの行為が行われないう普及啓発を強化するとともに、これらの行為を禁止した自然公園法等を適切に運用し抑止力とする。さらに、人とヒグマとの遭遇頻度が最も高い特定管理地（国立公園内の施設周辺や道路沿い等）においては、これまで追い払いを基本とした対応を行ってきた「行動段階1+」の個体についても、危険な行動を取る個体は必要に応じて捕獲を行うこととし、問題個体の管理を強化する。

本再発防止策の実施体制が整い次第、現在閉鎖している羅臼岳の岩尾別登山口・羅臼温泉登山口・硫黄山登山口及び羅臼湖歩道入口については、関係機関において事前に調査を行い、誘引物の状況や、見通しの悪い箇所等を確認したうえで、閉鎖を解除する。

本再発防止策については、登山シーズン終了後に実施状況の効果検証を行い、知床世界自然遺産地域科学委員会ヒグマワーキンググループおよび適正利用・エコツーリズムワーキンググループの助言を得て、1年後を目途に見直すこととする。

## 7.2 登山利用者への情報提供と指導の強化(平時)

- 登山利用者の視点に立った情報提供と注意喚起の強化・誘導
- 中央部利用の心得の見直しと周知（webサイトの新設）
- ヒグマ生息地における登山の行動規範（ヒグマとの突然の遭遇を避ける行動、クマ鈴・クマ撃退スプレーの携行、ゴミや食料の管理等）を計画段階で確認できるよう情報提供
- 登山計画書の提出を喚起
- 登山口に新しく設置する登山前チェックシートにより、登山利用者へ登山やヒグマに関する事前準備を促すとともに、入山人数や大まかな登山行程を把握する
- 登山口における情報提供と注意喚起の強化
- 登山道上でヒグマが多く出没する地点や見通しの悪い場所に関する情報提供の強化
- クマ撃退スプレーの普及とレンタル強化
- フードロッカー、ベア・キャニスターの利用を強く推奨

## 7.3 問題個体・危険事例を把握した際の対応の明確化

\*主に7月～9月を中心とする夏山シーズンに実施

### 対ヒグマ

- 登山道でのヒグマによる危険事例の把握の強化
- 一般登山利用者からの伝聞情報に基づく危険性評価が難しい場合を含め問題個体評価の見直しと対応決定手順の作成

#### 対人

- 登山利用者の行動変容に結び付く、リスク評価に基づく注意喚起
- 登山利用者の視点にたった情報提供と注意喚起の強化・誘導（再掲）
- 登山口における情報提供と注意喚起の強化（再掲）
- 危険事案が発生した際に登山口閉鎖と解除等を行う際の基準と手順をヒグマ管理の選択肢として明確化

### 7.4 問題個体発生の抑止の方策

#### 対ヒグマ

- 特定管理地における危険な行動をとる「行動段階1+」個体の捕獲を含む対応強化

#### 対人

- web サイト、SNS 等による情報発信の評価と改善  
例) 「知床のひぐま」「知床情報玉手箱」・施設等の web サイト及び SNS 等の評価と改善
- 来訪前段階での情報発信の強化  
例) レンタカー・ウェブサイトでの情報発信
- 来訪者の認知度および行動変容の把握  
例) 定期的なアンケート調査による確認
- 「人の接近・餌付けがヒグマの行動を変化させ、事故リスクを高める」というプロセスの理解促進  
例) ディスタンスキャンペーンの実施・餌やり防止呼びかけ
- 集中対策期におけるイワウベツ川沿いでの対策強化・継続  
例) 監視カメラの設置・巡視及び現地指導・停車や滞留の抑制策の実施
- 自然公園法第 37 条による餌やりやつきまとい行為の告発を可能とすべく自然公園法の運用体制を改善

### 7.5 中長期的対応

ヒグマの高密度生息地に「誰でも」「自由に」アクセスできることが課題として指摘され、来訪者へのリスクに関する情報及びヒグマに関する注意事項を確実に利用者に伝えること、及び、ヒグマの人なれを助長する接近・つきまとい等の行為の制限を徹底するために、アクセスコントロールの必要性が議論されてきた。アクセスコントロールには、公園全体のアクセスコントロール、登山口へのアクセスコントロール、イワウベツ川における人慣れを助長する行為を低減するための停車や降車の抑制など対象と手法についてはいくつか考えられる。

公園全体のアクセスコントロールの試行として、2020 年から 2022 年には、野生動物とのあつれき解消や安全対策、新たな魅力創出や体験型利用の推進をねらいとした、知床自然センターから先の道道 9 3 号線（知床公園線）においてマイカー交通規制を実施し、シャト

ルバス（ナショナルパークシャトル）を運行する Shiretoko Autumn Bus Days が実施された。この取り組みは有効であったが、国や地方自治体の補助金を活用したものであり、単独事業では赤字となるため費用負担や運営体制、地域理解等の課題があり継続されていない。

今回の事故を踏まえて改めてアクセスコントロールの対象や手法について、持続可能性を含めて関係機関と議論し、その実現に取り組むこととする。また、登山道等については将来的にバックカントリーの適正な利用の推進も視野に入れた利用システムの構築を目指すことが望ましい。

知床では、行政機関、施設、テーマごとに web サイトが作成され、SNS も利用されているが、乱立気味であり来訪者が必要な情報に到達しにくいのが現状である。このため、来訪者・登山利用者目線に立って整理を行い、情報発信のプラットフォーム化に取り組む。

また、人員不足に対しては、ヒグマ対策を担う人員の確保と育成、DX の導入による一部業務の効率化と省力化に取り組む必要がある。